東京蜘蛛談話会創立10周年記念号

目　次

東京蜘蛛談話会誕生より10年を迎えて……萱嶋　泉　1
東京蜘蛛談話会創立10周年にあたって……松本誠治　3

明治時代の日本のクモ……小野展嗣　4

ビジョオニグモの死・その後……佐藤幸子　13
クモの生態2題……中平　清　17
クサグモの同居グモ……石山鉄幸　19
クモ（12種）の産卵個数……松本誠治　21

北緯50度線上報告……小野展嗣　23
高山不動というところ……田中理恵　26

ハエトリグモの分類（Ⅳ）……松本誠治　29

都会のクモ　Ⅰ……新海栄一　35
飛島・粟島のクモ……吉田　哉　39
山梨県山中湖村旭ケ丘のクモ……熊田憲一　41

DRAGLINE　42
コホラヒメグモと卵のう……高橋米夫　42
「ひぶがし」追録……小野展嗣　42
クモの産卵回数について……鈴木勝浩　42
三宅島にいたオダカグモ……鈴木勝浩　43
イソコモリグモとイシカリコモリグモ……高野・新海・熊田　43

東京蜘蛛談話会観察会報告
伊豆半島の真正クモ類……新海栄一　44

編集後記……50

東京蜘蛛談話会誕生より１０年を迎えて

萱　嶋　　泉

クモの好きな者が集って話し合う会と言うので、談話会と名がついた。早いものでもう１０年になる。

クモを研究する者がお互を理解しあうのには、どうしても頻繁に会合を持たねばならない。それで毎月一回必ず会を開いて、各自が調べたことなど話しあって、少しずつクモの知識を増やすことに専念した。それと同時に、クモの研究をする人を増やすことにも気をくばった。同好の若い人を一人でも多く会員にすることも、談話会員の仕事の一つであった。最初の２年間はほんとうによく会を開くことが出来た。遠い所からきちんきちんと拙宅まで来て下さった。この２年間は２４回の会合を開いたが、記録は廻り持ちで書いた簡単なもので、それを公開することはしなかった。しかし必ず寄書を５名ないし６名の方々に出した。この寄書は大変喜ばれた。当時の常連は松本、大河内、新海、小野、小林の諸氏で、時々浜村氏が宇都宮から参加された。次第にこの談話会が注目をひくようになって、会の記録を見せてほしいと言う人が増加して来た。それでゼロックスにとって配ったりするようになった。

昭和４３年１０月４日に岸田先生が、突如として逝去された。このことは東京クモ談話会の一大事で、この先生の死を境にして談話会は大発展をとげたのである。それは先生の蔵書の整理を、われわれの会の仕事として行ったからである。あの練馬の先生宅に毎土曜日に伺った。この仕事のお蔭で、会員の気持は全く一致した。ほんとうに深い理解と信頼が出来た。これ以後の談話会は活潑になった。大河内氏は学校の都合で出席が出来なくなったが、榎田、国見、石山の諸氏と佐藤姉が熱心に参加されるようになった。こうなって会の機関誌「ＫＩＳＨＩＤＡＩＡ」が発刊されるはこびになったのである。誌名の由来は第１号に書いたので、ここでは省くことにする。会誌も号を追うにつれ内容が充実し、とうとう今日のような誠にすばらしいものになった。その間会員数も増加し１００名の声を聞くのもそう遠くではない。これも会員一人一人が、自分の会であることを自覚し、誇りをもって努力してくださった御蔭であると思う。現在では採集会、同定会、三会合同例会、等々全く他に類を見ない美事な会となった。それぞれの会合に出席されて私共を励まして下さる高野、古浜、小澤、の諸氏に感謝せざるを得ない。また若いメンバーの働き手として、熊田憲一、栗原輝代子、田中理恵、嶋田順一、山川守、高橋登の諸氏の登場はこの会の大なる収穫であった。きっとこれからもどしどし新人が立派に会の運営をやってくれることと思う。この談話会の松本、新海、小野の３氏によってクモの図鑑が出版されたことは、ほんとうに嬉しいことであって、いかにこの会が発展して来たかを物語るものである。

クモを多くの人が注目するようになった。これはクモは咬まないもの、恐しいものでないとの認識が、ゆきわたった結果だと思うのである。

クモの研究はこれからに期待する所が多い。それにはクモを研究する人が増加することが、一番大

切である。私共は専門家を養成すると同時に、同好者を増加させねばならない。その為にはどうしても、この東京クモ談話会が、底辺を拡げる仕事を地道にせねばならない。この１０年目を期として皆で、大いに頑張り、日本のクモ学、否世界のクモ学に寄与したいと思う次第である。

〃学問は、せねばならぬと気付いた者がするもので、気付いた時にその方法を自分でみいだし得るものである。

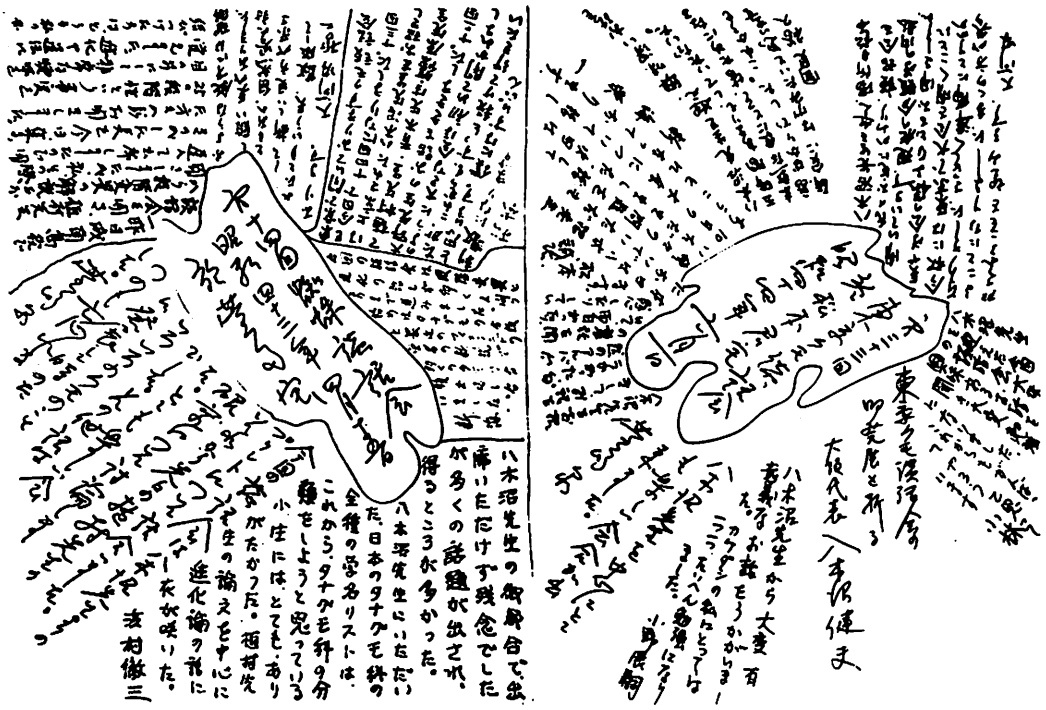
やる気を長く続けるためには友が必要であるし、師もまた必要である。

この談話会は、そのような者の集りでありたい。

学問は奥が深い、ゆけどもゆけども底に到着することはない、故に自己をみつめることに厳しくなければならない。そうでなければ、とうてい底に到着することは出来ない。

自己に厳しい人は他人を批判することは出来ない。その人の真価を評し得るのは神のみである。

どうか談話会の会員相互は、手に手をとって、１人の落後者も出さぬように、励まし合って頑張りたいものである。〃



第１４回及び第３３回談話会の寄書　（大阪　八木沼　健夫博士　提供）

東京蜘蛛談話会創立１０周年にあたって

松　本　誠　治

談話会ができて、もう１０年になる。ひとむかしということになるが、そんなに長かったとは思えない。この１０年間のＫＩＳＨＩＤＡＩＡの発育ぶり（正味は８年であるが）や、談話会通信のコンスタントな発行をみれば、談話会が、どれほど活発に行動してきたかは、すぐに、そして十分に理解できる。発会後数年間運営にあたってきた僕が、あまり会をほめることは我田引水であるし、またオコガマシイ話である。最近のデータしかないが、会員が１９７５年５月には６０名足らずであったのが、９月には６０名を越え、翌年の９月には７０名余りとなり、１９７７年９月には８６名となっている。このことは、談話会への理解が深まり、多くの協力を与えられたものと思う。うれしく感謝にたえない。

感謝といえば、我々談話会員が最も感謝しなければならない人がいる。萱嶋泉先生である。僕がクモに興味を持ってまもなく、東京でクモ学会員の集まりがあり、参加させてもらったことがある。そのときに先生は、僕と新海栄一氏のところに来て（先生の方からである！）名刺を下さり、東京の若い人達であつまって話をしよう、といってくださった。場所は先生のお宅を提供してくれるという。そこで集って来た数人のメンバーが、しばらくして東京蜘蛛談話会を結成したのである。結成前後にはいろいろな問題が起ったが、先生はそれをうまく処理してくださり、我々メンバーの意志の反映した会となった。先生がいなければ談話会の誕生はずっと遅れ、またたとえ生れたとしても現在のような姿にならなかっただろう。先生がいなければ、会誌ＫＩＳＨＩＤＡＩＡの発行や東亜蜘蛛学会の第一回大会、その後の東京大会は実現しなかっただろう。僕などは、先生の会誌発行や大会開催の計画に、力不足を理由にいつも二ノ足を踏む側であった。現在の談話会については、及第点をかなり上廻るものと思っている。

運営委員会で討議しているとはいえ、かなり勝手に活動してきている我々を、いつも笑顔でながめていてくれる先生であり、談話会への苦情など――もしあればの話だが――を一身に引き受けてくださっている先生であり（僕自身は、そんなわけで苦情があるのかないのか全く知らないでいる）、そして、いまも我々以上に中学生・高校生の指導に熱心な先生である。我々は、創立１０周年に際して、談話会の生みの親である萱嶋先生に心から感謝して、内外共に十分満足できる談話会にするための努力をおこたってはならないと思う。「もう１０年」と過去をみて安心するよりも、「もう１０年」「もう２０年」と未来へ向って頑張りたいと思う。

◎談話会に関する文献

ＫＩＳＨＩＤＡＩＡ，（１）：１，（１３）：１，（１８）：６，（２６／２８）：１－２，（２９／３２）：３９，（３８）：１４；談話会通信，（１３）：２，（１４）：３，（１５）：８，（１９）：６；ＡＴＹＰＵＳ，（４６／４７）：２６，（６７）：１５－１７；採集と飼育，３９（４）：１７３（１９７７）；

明治時代の日本のクモ*

―― ミュンヘン博物館所蔵日本産クモの未整理標本の同定記録 ――

小　野　展　嗣（西ドイツ　マインツ大学）**

本年（１９７７年）夏、イギリスで開催された国際クモ学会議の帰途、大阪の八木沼、西川、田中の三氏が西ドイツのフランクフルトに数日間立ち寄られ、ゼンケンベルグ博物館にて同館所蔵及びミュンヘンとハンブルクの博物館からグラスホフ博士（ゼンケンベルグ博物館）の御好意でとり寄せられたいくつかの日本のクモのタイプ標本を観察された。筆者は幸いイギリス、ドイツで皆さんと御一緒することができた。その際、ミュンヘン博物館からはタイプ標本のほかに全く未整理の日本のクモの標本が同時に多数送られてきていた。しかし八木沼先生は時間が限られていたので、残念ながらその分の標本を見ることができずに帰られた。筆者はその未整理標本に関してグラスホフ博士から、同定してみないかとの誘いを受け、８月１５日と１９日の２日間それをひととおり見ることができたので、その結果を報告する。

標本は１０数本の管びんに何種もが一緒に入れられており、ラベルの記載も非常に不充分であった。しかも幼生が多く、一部を除いては形態学的に見ても興味は薄い。しかし中には１８８０年（明治13年）採集というものもあり、それはおそらく現存する日本産クモの学術標本としては最古の部類に属する。そういう意味では非常に貴重な標本であり、また少数ではあるが未知種も発見されたので、ここに覚え書きのような形で記録することにした。わずか２日間で２００個体近いクモを見たので、同定に時間のかかるクモについては種まで至らなかったものもある。また未知種などの興味あるクモに対しても充分にその形態を観察できなかった。それらのクモについてはなるべくスケッチをとったので、図を参照してほしい。幼生あるいは破損のため種名決定困難なものが多数あったが、これらはすべて目録から省いた。Ⅰ・Ⅱ・・・XV の数字はそれぞれの管びんを示し、筆者が仮につけた番号である。標本は急ぎミュンヘン博物館へ返却された。未知種に関しては後日必要が生じたらもう一度詳しく観察するつもりだが、産地不明のものが多いので、むしろ同種のクモが再び採集されることを望む。

西川喜朗氏からヤチグモ類に関し、松本誠治氏からはハエトリグモ類に関して親切な御助言を戴いた。記して心から感謝の意を表する。Dr．Grasshoffには研究の機会を与えて下さったことに対して厚くお礼申し上げる。

Ⅰ　ラベル：Tokio，　その他不明

---

* On a collection of the unidentified Japanese spiders in the Museum of Munich.

** ONO, Hirotsugu (Institut für Zoologie der Univ., Mainz, West Germany)

1. *Nephila clavata* L. Koch　　ジョロウグモ　2♀

Ⅱ　ラベル：Tokio，　その他不明

1. *Cyclosa octotuberculata* Karsch　　ゴミグモ　1幼（－3～4）

Ⅲ　ラベル：Tokio，　16．Ⅰ．1880，採集者不明

1. *Antrodiaetus roretzi* (L. Koch)　　カネコトタテグモ　1幼（体長5 mm）

かなり若令の幼生であるが、中窩縦向き、下顎、下唇に歯状突起のない点、また東京にはエゾトタテグモは産しないことなどから本種と同定した。

2. *Ariadna lateralis* (Karsch)　　ミヤグモ　1幼（体長5 mm）
3. *Tetragnatha squamata* Karsch　　ウロコアシナガグモ　1幼（＋2）
4. *Coelotes insidiosus* L. Koch　　シモフリヤチグモ　1♀
5. *C. luctuosus* L. Koch　　メガネヤチグモ　2♀
6. *Dolomedes sulfureus* L. Koch　　イオウイロハシリグモ　1幼（＋2～3）
7. *Pisaura lama* Bös. et Str.　　アズマキシダグモ　2幼（－2）
8. *Pardosa astrigera* L. Koch　　ウツキコモリグモ　1幼（－1）
9. *Oxytate striatipes* L. Koch　　ワカバグモ　3幼（－2～3）
10. *Coriarachne fulvipes* (Karsch)　　コカニグモ　1♀（図24）
11. *Carrhotus xanthogramma* (Latreille)　　ネコハエトリ　1♂，1♂（－1）
5♀（－1）（図1－2）

この中でコカニグモの冬期における成体の採集は特筆に値する。

Ⅳ　ラベル：Tokio，　その他不明

1. *Argiope amoena* L. Koch　　コガネグモ　1♀
2. *Dolomedes sulfureus* L. Koch　　イオウイロハシリグモ　1幼（6 mm）
3. *Heteropoda venatoria* (Linne)　　アシダカグモ　1♀
4. *Selenops bursarius* Karsch　　アワセグモ　1♀

東京でのアワセグモの採集記録は極めて稀と思われる。採集時期はコガネグモの成体出現時期から推定して6～9月と考えられる。

Ⅴ　ラベル：Tokio，　その他不明

1. *Latouchia typica* (Kishida)　　キシノウエトタテグモ　6幼（5～6 mm）
2. *Gamasomorpha cataphracta* Karsch　　ダニグモ　2♀
3. *Araneus* sp.　　オニグモ一種（ヤミイロオニグモ？）1♀（図18）
4. *Dyschiriognatha tenera* (Karsch)　　ヒメアシナガグモ　1幼（－2～3）
5. *Coelotes insidiosus* L. Koch　　シモフリヤチグモ　1♂（図21－22）
6. *Coriarachne fulvipes* (Karsch)　　コカニグモ　1♂（図25－26）
7. *Oxyptila* sp.（A）　　キハダカニグモ一種（A）　1♀（図13－14）
8. *Oxyptila* sp.（B）　　キハダカニグモ一種（B）　1♀（図15－16）

7・8両種とも未知種である。原記載以来全く採集記録のないコキハダカニグモ *Oxyptila truciformis* Bös. et Str.や白甲鏞氏（Paik，1974）が韓国から記載している各種とも異なる。なお本属名として*Oxyptila*と*Ozyptila* の二通りが文献に用いられているが、これは原記載においてSimon（1864）がギリシャ語をラテン化する際*x*とすべきところを*z*としたのに始まる。Thorell（1869）は最初にこの誤りを指摘し、Simon自身もそれに従ってHistoire naturelle des Araignees の第2版（1895）には訂正された*Oxyptila*を用いている。Bonnet（1958）もそれを支持した。これに対してそもそもこの改正は無効であるとする意見があり、Roewer（1954）は原記通りのつづりを用いた。世界のクモ学者が範と仰ぐRoewerとBonnet の両方のカタログにそれぞれ違う見解が用いられたのがその後の混乱の原因である。我国では従来*Oxyptila* の方が用いられてきた。（Bös. et Str.1906，八木沼.1960，松本他.1976，その他）この件についてかつて八木沼先生とディスカッションした際も*Oxyptila* の使用の方が適当であるという結論になった。しかし、最近の命名規約32・33条の解釈では学名の訂正が許されるのは性などの誤りのみで、たとえミスプリントでも訂正は無効であるとするのが一般的でありそれを根拠にDondale & Redner（1975）は北米の同属のモノグラフに*Ozyptila* を用いた。この件についてはいずれ明らかにしたいが、本稿では慣習にならい、*Oxyptila* を使用しておく。ちなみに、最も普通に見られるキハダカニグモ*Oxyptila decorata* Karsch と同定されているクモは、生殖器の構造などから見て別種である。（未発表）

9. *Carrhotus xanthogramma* (Latreille)　　ネコハエトリ　1♀（一1）

10. *Clubiona* sp.（= *Clubiona flavipes* (Saito)）：小野，1975

キアシフクログモ　1♂（図27－28）

筆者（1975）は日光から本種を記録再記載した際、原記の*Agroeca*から*Clubiona* に転属した。ところがその後、この学名がチリ産のフクログモの一種*Clubiona flavipes* Nicolet，1849とホモニムの関係を生じていることを発見した。もちろん先取権はチリ産のものの方にある。日本産の本種のタイプ標本は現在残っておらず、学名の取扱いに若干未だ問題があるので、とりあえずこの学名の使用を中止したい。なお、筆者が同報文の中で同時に記載した♀は本種とは別種である可能性が強いので、一応キアシフクログモとは切り離しておく。キアシフクログモはヤマトフクログモと非常によく似ており、同種の可能性もある。

このびんの中のクモの内容はⅢのびんのものと非常に似ており、幼生の多い点から考えても冬期或は早春に採集されたものと思われる。

Ⅵ　ラベル：Japan，Sammlung Döderlein，年月日不明

1. *Synaema globosum japonicum* Karsch　　フノジグモ　1♀

Döderleinは当時の有名な動物学者だそうである。Döderlein収集物（標本）となっているだけなので、彼が実際日本へ来て採集したのかは不明。標本はかなりいたんでいる。

Ⅶ　ラベル：Jesso，Nemuro，12. Ⅷ. 1900，det. Strand

1. *Araneus pinguis* (Karsch) アカオニグモ

det. StrandはStrandが同定したことを表わす。採集者は不明。Bös. et Str.（１９０６）の本種の項に産地として記載されている。

Ⅷ ラベル：Abwratsubo, bei Misaki, 8-X.1904, leg. Doflein

1. *Philodromus auricomus* L. Koch キンイロエビグモ １♀（－１）

採集地は神奈川県三浦半島の油壺と推定される。Doflein 採集。彼の名を冠したクモにドフラインオニグモ*Araneus dofleini* Bös. et Str.というのがある。当時の動物学者で、また日本の動物の採集家としても非常に有名。日本の腔腸動物に関する大著がある。

Ⅸ ラベル：Japan のみ，その他全く不明。

1. *Myrmarachne japonica* (Karsch)？ アリグモ？ ８♂３♀

Ⅹ ラベル：Japan, その他不明

1. *Theridion chikunii* Yaginuma バラギヒメグモ １♀
2. *Argiope amoena* L. Koch コガネグモ １幼（１０mm）
3. *Cyclosa octotuberculata* Karsch ゴミグモ １♂
4. *Tetragnatha* sp. アシナガグモ一種 １♀
5. *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius) ハナグモ １♀
6. *Xysticus croceus* Fox ヤミイロカニグモ １♂
7. *X. insulicola* Bös. et Str アズマカニグモ １♀
8. *Dendryphantes atratus* (Karsch) カラスハエトリ １♂
9. *Myrmarachne japonica* (Karsch)？ アリグモ？ １♀（図３－４）

Ⅺ ラベル：Kachi, その他不明

1. *Heteropoda venatoria* (Linne) アシダカクモ １♀

採集地のみ"Kachi"とラベルに記入されてある。日本の地名のどこを差すのか筆者には見当がつかなかったが、アシダカグモの分布から見て本州南岸以南と思われる。Kachiは"カチ"のほかにドイツ語読みすると"カヒ"、或はなまって"カシ"とも考えられる。或は高知か。

Ⅻ ラベル：Japan, その他不明

1. *Dictyna* sp. ハグモの一種 １♀（図２０）
2. *Dolomedes sulfureus* L. Koch イオウイロハシリグモ １幼（＋3～4）
3. *Pisaura lama* Bös. et Str. アズマキシダグモ ６幼（－１）
4. *Misumenops japonicus* (Bös. et Str.) コハナグモ １幼（＋３～４）
5. *M. tricuspidatus* (Fabricius) ハナグモ １幼（＋２）
6. *Oxytate striatipes* L. Koch ワカバグモ １♀
7. *Philodromus spinitarsis* Simon キハダエビグモ １♂（－１）
8. *Silerella vittata* (Karsch) アオオビハエトリ ２幼（－２）
9. *Carrhotus xanthogramma* (Latreille) ネコハエトリ １♂

XIII ラベル：Japan，　その他不明

1. *Ariadna lateralis* (Karsch)　ミヤグモ　1幼（6mm）
2. *Argiope minuta* Karsch　コガタコガネグモ　1♀（−1）
3. *Coelotes* sp.　ヤチグモ一種　1♀（図23）
4. *Pisaura lama* Bös. et Str.　アズマキシダグモ　1♂（−1）
5. *Selenops bursarius* Karsch　アワセグモ　3幼（−1）

採集地は本州南部以南と思われる。

XIV ラベル：Japan，　その他不明

1. *Argiope minuta* Karsch　コガタコガネグモ　1♀（−1）
2. *Meta yunohamensis* Bös. et Str.　メガネドヨウグモ　1♀
3. *Tetragnatha caudicula* (Karsch)　トガリアシナガグモ　1幼（9mm）
4. *T. praedonia* L. Koch　アシナガグモ　1♀（図19）
5. *Pisaura lama* Bös. et Str.　アズマキシダグモ　1♀（−1）
6. *Pardosa astrigera* L. Koch　ウヅキコモリグモ　1♀卵のう
7. *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius)　ハナグモ　1♂
8. *Xysticus insulicola* Bös. et Str.　アズマカニグモ　1♂（図12）
9. *Carrhotus xanthogramma* (Latreille)　ネコハエトリ　2♂
10. *Hasarius doenitzi* Karsch　デーニッツハエトリ　1♀（図10）
11. *Icius linea* (Karsch)　メガネアサヒハエトリ　1♀（図11）

採集時期は夏成体になるクモがまだ一1令（アズマキシダグモやコガタコガネグモ）であり、またメガネドヨウグモやハナグモが成体であることなどから推定して5〜7月、採集地は北方種、南方種ともにほとんどないことや、コガタコガネグモの分布から考えて本州南岸線付近と思われる。

XV ラベル：Japan，　その他不明

1. *Araneus abscissus* (Karsch)　キザハシオニグモ　1♀（図17）
2. *Cyclosa octotuberculata* Karsch　ゴミグモ　3♀（−2）
3. *Tetragnatha squamata* Karsch　ウロコアシナガグモ　1幼（＋2〜3）
4. *Pisaura lama* Bös. et Str.　アズマキシダグモ　5♂（−1）
   1♀（−1），6♀（−2）
5. *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius)　ハナグモ　1♀2♂
6. *Oxytate striatipes* L. Koch　ワカバグモ　1♀
7. *Carrhotus xanthogramma* (Latreille)　ネコハエトリ　1♂
8. *Evarcha albaria* (L. Koch)　マミジロハエトリ　2♂（図8−9）
9. *Hasarius doenitzi* Karsch　デーニッツハエトリ　1♀
10. Salticidae sp.　ハエトリグモ一種　1（腹部のみ）（図5−7）

採集地、採集時期はXIVのびんとほぼ同様と考えられる。

文 献

Bösenberg W. & Strand E., 1906. Japanische Spinnen. Abh. senckenberg. naturf. Ges. 30:93—442.

Bonnet P., 1945—61. Bibliographia Araneorum. Toulouse.

Dondale C. D. & Rendner J.H., 1975. The genus *Oxyptila* in North America (Araneida: Thomisidae). J. Arachnol. 2:129—181.

松本誠治・新海栄一・小野展嗣，1977 学研の図鑑クモ 学習研究社，東京、pp. 1—160

Nicolet H., 1849. Arachidos. in Gay C.: Historia fisica y politica de Chile. Zoologia, 3:319—543 (未見)

小野展嗣，1975、日光の真正蜘蛛類 ATYPUS(64):7—26

Paik K. Y., 1974. Korean spiders of genus *Oxyptila* (Araneae: Thomisidae). Educ. J., 16:119—131.

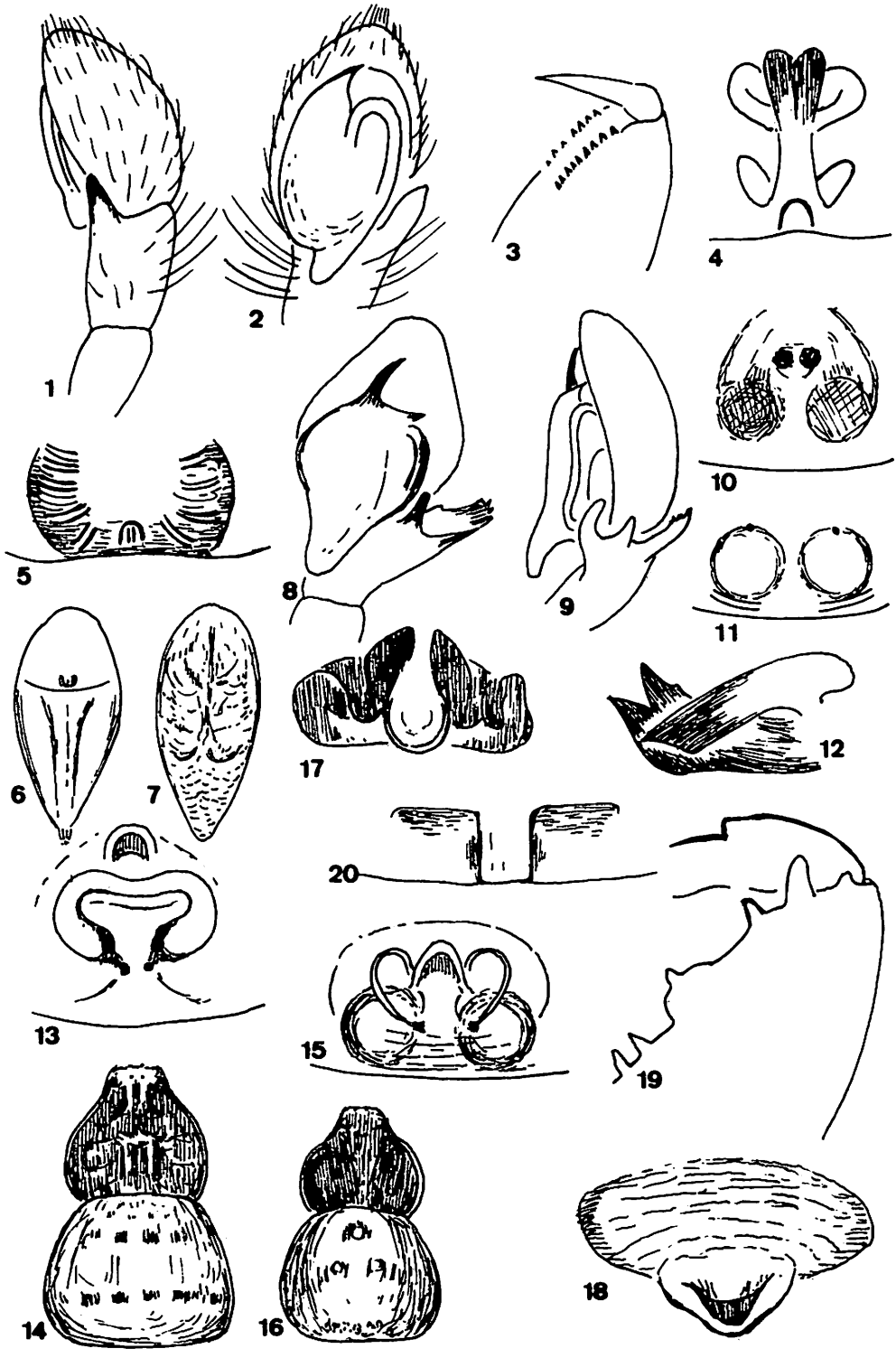
Roewer C. F., 1942—1954. Katalog der Araneae, Bremen & Bruxelles.

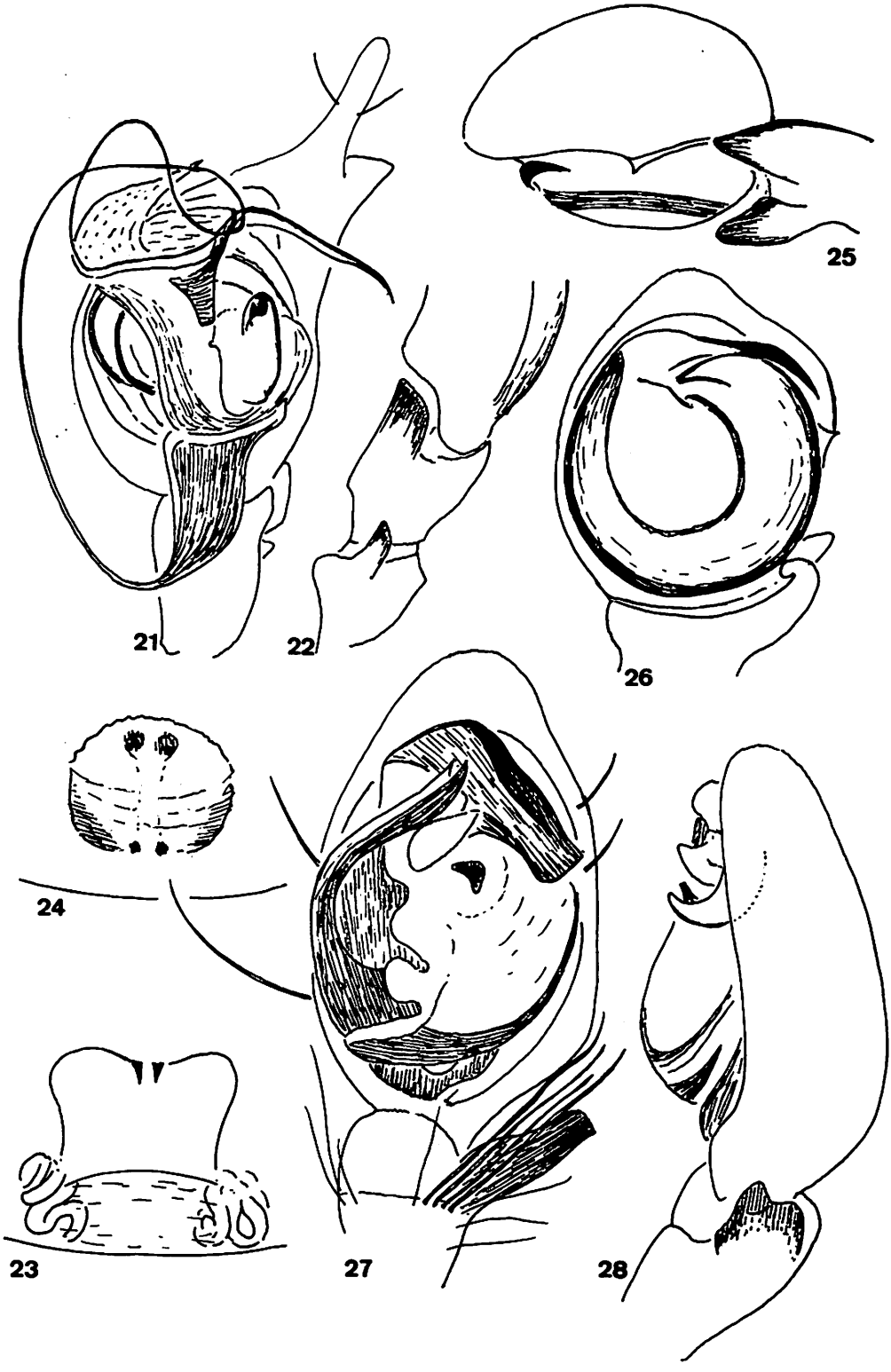
Simon E., 1864. Histoire naturelle des Araignées, Paris. pp. 1—540.

Simon E., 1895. 同上 2me ed., 1(4), Paris. pp. 761—1084.

Thorell T., 1869. On European spider. I. Review of the European Genera of spiders, preceeded by some observations on Zoological Nomenclature. N. Act.reg. Soc. Sci. Upsal., (3)7, pp. 1—108. (未見)

八木沼健夫，1960、原色日本蜘蛛類大図鑑 保育社，大阪、pp. 1—186


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20


21
22
23
24
25
26
27
28

図の説明

1－2　*Carrhotus xanthogramma* (Latreille)　ネコハエトリ♂
：1）触肢後側面　2）触肢下面

3－4　*Myrmarachne japonica* (Karsch) (?)　アリグモ♀(?)
：3）上顎内面　4）外雌器

5－7　Salticidae sp.　ハエトリグモ科一種♀
：5）外雌器　6）腹部下面　7）腹部上面

8－9　*Evarcha albaria* (L. Koch)　マミジロハエトリ♂
：8）触肢下面　9）触肢後側面

10　*Hasarius doenitzi* Karsch　デーニッツハエトリ♀：外雌器

11　*Icius linea* (Karsch)　メガネアサヒハエトリ♀：外雌器

12　*Xysticus insulicola* Bös. et Str.　アズマカニグモ♂
：触肢のbulb上の突起

13－14　*Oxyptila* sp. (A)　キハダカニグモの一種(A)♀
：13）外雌器　14）頭胸部・腹部

15－16　*Oxyptila* sp. (B)　キハダカニグモの一種(B)♀
：15）外雌器　16）頭胸部・腹部

17　*Araneus abscissus* (Karsch)　キザハシオニグモ♀：外雌器

18　*Araneus* sp.　オニグモ一種(ヤミイロオニグモ?)♀：外雌器

19　*Tetragnatha praedonia* L. Koch　アシナガグモ♀：上顎

20　*Dictyna* sp.　ハグモ一種♀：外雌器

21－22　*Coelotes insidiosus* L. Koch　シモフリヤチグモ♂
：21）触肢下面　22）触肢膝・脛節後側面

23　*Coelotes* sp.　ヤチグモ一種♀：外雌器

24－26　*Coriarachne fulvipes* (Karsch)　コカニグモ♀♂
：24）外雌器　25）♂触肢後側面　26）♂触肢下面

27－28　*Clubiona* sp. (=*C. flavipes* (Saito))　キアシフクログモ♂
：27）触肢下面　28）触肢後側面

小野(1975)の図はやや前方から見たものである。(ATYPUS(64):15)

ビジョオニグモの死・その後

佐　藤　幸　子

昭和５１年１０月９日。私の庭に初めてビジョオニグモが現れました。今までにも色々なクモが庭の木に住居をかまえました。長くいてもらいたいと思いながら観察していますと、一ケ月でいなくなったり一週間で行方不明になったり、ひどい時には二日位で姿を消してしまいます。このビジョオニグモは何時までいてくれるのかな、と考えながらなるべく刺激しないようにして見ていますと、何が気にいったのか居着く様子なので、本気になって観察を始めました。

一ケ月たつとお腹が大きくなったのに気がつきました。そして１１月中旬の夜中すぎ無事出産。その後２８日間卵のうを守り、親は死にました。卵のうの中を調べて見ますと、乳白色の卵がつやつやとしていましたので来年の春のフ化を待つ事にして、大きな葉をそのままビンの中に入れ、暖房のきかない納戸の本棚にしまいました。

1977年2月17日（木）　今年はとても寒い日が続いています。ビジョオニグモの卵のうがどうなっているかと見てみました。卵はまだ水っぽく黄色でした。今までの屋内温度は下記のとおりです。（野外はこれより４℃か５℃位低いと思います）

	温い日	寒い日	極寒
朝（６時から７時頃まで）	１０℃	５℃	３℃
昼（１時から２時頃まで）	１５℃	１０℃	７℃

3月5日（土）　晴　卵のうの中を調べたら無事フ化していました。全身クリーム色で足の先だけ黒いのが目立ち、まだ動きは鈍いです。

3月7日（月）　晴　身体のクリームが濃くなり足は全部背黒く、腹背後部の模様の見られるところに黒点が二つ現れました。動きも激しくなっていますが、まだ外部へ出る様子はありません。

3月9日（水）　晴　糸イボが黒く色づき、腹背もビジョオニグモらしき様子をはっきり現し初め、足もダンダラ模様になりました。卵のうの中は子グモの色が写って真黒にすけて見えますが、まだ外へ出る気配はありません。

3月12日（土）　晴　卵のうの内部がふくれ上り、もう一杯ではちきれそうな感じでしたが、内側から破けてくるのか一部薄くなったところから子グモがムリムリ外へはい出して来ました。

3月15日（火）　晴　フ化してから１０日目、二三匹卵のうから出たり入ったり。ちょっとした刺激を感じると一目散に卵のうの中に戻ります。

3月20日（日）　曇　四匹だけ出て来て葉の間（卵のうを産みつけられた葉）を上ったり下ったり、糸を使って歩き始めました。

3月23日（水）　雨　夜、新しい子グモが五匹出て来ました。

3月24日（木）　曇風少し強し　朝、卵のうを作ったアオキのもとの場所に、卵のうのついた葉を

くくりつけました。すぐに子グモはゾロゾロと出て来ましたが、第一番に出てきた子グモは糸を流してすぐ隣の葉に渡り、母親と同じ様に自分の住居を作り同じ様に裏側に入ってすましています。糸が細すぎるのでお腹が丸見えでした。他の子グモはなぜか上へ上へと歩き出し、アオキの葉に囲まれたとても良い空間にそれぞれの糸を張り渡し、まどいの用意を始めるものの様でした。

3月25日（金）　曇　　まどいをするかの様に見えた空間には一匹の子グモも居ません。あちこち調べますとあちこちの葉先に住居を作って落着いていました。一匹だけのものもあり、三四匹同じ住居に一緒に入っているものもありました。卵のうの中はまだまだ子グモでいっぱいです。

3月29日（火）　曇風強し　　私の家のビジョオニグモはまどいをしない様で、暖かい日に少しずつ卵のうを離れ散って行きます。

① 何個体もが一つの住居に一緒にいるのが不思議なので、どうやって折合をつけるのか試してみました。まず、落着いている一匹のところへウロウロ住居をさがしている一匹を置いてみました。後者は先住者を気にしていましたが、自分勝手に同じ所に糸を張り始めました。すると先住者はすぐに表に出て来て、自分の糸を張り始めます。もちろん途中でぶつかります。お互い四本の足（左右第一歩脚・第二歩脚）でモシャモシャさわり会って別れますが、葉端に糸をかけて戻って来ると又真中で出会い、モシャモシャ気を悪くしている様子です。そのうち後者が張った糸の裏にもぐり込んで落ち着きます。先住者はそれを知らず、葉端から真中にもどって来て当然ぶつかる相手が下にいるのに気がつき、前方の葉端に走って行って裏側に大急ぎでもぐり込みます。二匹並んでから近すぎるとか、じゃまっけだとか、かわいい小ぜりあいがあって、面倒になったのか又一方が表へはい出して糸を張り始め、又後者がウロウロと出て来て同じ事を始め、真中でモシャモシャ、まん中でモシャモシャ・・・・・。この小さなハリアイ方がとても面白かったです。一時間たって行って見たら、どうにか折合がついたのか仲良く並んで落着いていました。

② アオキの最高所、つぼみの先端とほかのつぼみの先端約２０cmの間に糸を一本張り渡し、その真中にジッとしている子グモが一匹。風が吹き風が吹き、どんな強い風でもグルグル振りまわされていても糸の真中で頑張っていました。そのうち数回目の強風が吹いたとたん前の糸を切り、自分が先に立って凧のように飛んでゆき、アオキの先端より２m位高く、場所も離れた柿の枝に取りつきました。子グモとアオキの間には一本の長い長い細い糸が引かれてありますので、飛びながらどんどん糸をくり出していったのでしょう。子グモは柿の枝の上をウロウロしたりぶら下って見たりしていましたが、まだ柿の葉が出ていないので何か適当でないことを悟った様な感じでした。時間がかかるので、ほかの子グモを見ているうちに、どこかに行ってしまいました。その後には柿の枝から枝へと長い糸が張られてありました。

4月1日（金）　晴風有り　　子グモも随分出て行ったようなので、アオキの囲りにある木を詳しく調べてみました。ツバキ・サザンカ・サツキ・キョウチクトウ・チョウジ、どの葉を調べてもビジョオニグモの子は住居を作っていませんでした。住居を作っているのは親が生活し、卵のうを作ったフイリアオキの雄木だけでした。

先日無理に入れた子グモの住居はやっぱり折合いがつかなかったらしく、空になって居りました。ほかの子グモで四五匹仲良く住んでいたところも分散したらしく、皆一匹づつになっていま

した。それで卵のうの中にまだ残っている子グモを追い出してみました。※一匹だけのほかは皆すぐに住居を作り始めたり、他人のところへ潜り込んで行きましたが、一住居だけほんの少しもめただけであとは皆親切に同居を許してくれました。小さな狭い住居の中に二列に並んで六匹、七匹と仲良くしている姿はとてもほほえましいかぎりです。

※ 目の前から急に飛び上った子グモがいたので急いで追いました。やはり糸の先に子グモがいて、糸を伸ばしながらアオキの上を飛び越す感じでしたが、風が止み最高所のつぼみに取りつきました。それから糸を流し２０cm先のつぼみの先端まで一本糸を張り、その真中で手足をちぢめ、ジッと静止して何かを待って居ります。風がだんだん強くなり振りちぎれそうになった時、身体だけスルスルと上に舞い上りました。けれど運悪く風がフト止まってしまったので、３m位先の草むらに糸の光と共に落ち行方不明。子グモからつぼみの先まで張られてあった糸は、アオキのつぼみにからみついていました。卵のうにはまだ四分の一ぐらい元気な子グモが残っていました。

4月2日（土） 晴 １２：００今日は風が無いので子グモの様子を見に行きました。飛ぼうとする意志の子グモが七匹いました。例によって上へ上へと登って行き、最高部に１５cmから２０cmの糸を張り渡すとその真中で風を待ちます。いくら待っても（私がくたびれる位）風が吹かないと又別の場所に例のごとく糸を張り、その真中に丸まります。私の口からいくら強く息を吹きかけても子グモが飛ぶ状態にはなりません。そのうち三匹はあきらめて他人の住居に潜り込み、四匹は相変らず風を待っていました。卵のうにはまだ子グモが残っています。

18:00 もう暗くなって来ました。風を待っていた子グモは見あたらず、葉の先に住居を構えている子グモ達はめいめい動き始め、どうやら円網を作りたい模様ですが、なかなかワク糸を作るのがうまく行かずモタモタしています。

22:00 一匹も円網を作って居りませんでした。

4月10日（日） 曇 朝１１：００、垂直円網をきれいに張り葉の住居に潜んでいるのが一匹。円網の中心に占座しているのが一匹。半分円網が破れて破れたところで考え込んでいるのが一匹。あとは住居に引き込もっていて呼糸も張ってありません。半分破れた網の子グモはややあって半分だけ作り直し、中央に占座しました。卵のうは完全にカラになりました。

4月15日（金） 曇 卵のうから出てためらわずに住居を作った子グモ達は、皆頭を天に向けて（すなわち私達の立姿と同じ格好で）静止していました。住居にはアオキの大きく肉太の葉が垂れ下がっている細長い最先端を必ず選び、葉わたり（葉の右端と左端の間）約５～６mm に張り渡した糸の上下の幅約３～４mm の大きさの隠れ家を作ります。一住居に一匹の場合は時折親グモと同じ様に表と裏の両方から糸の補強をし住居の中央を白っぽくボカシていますが、いずれにしろ糸が細すぎるので頭を上に向けて静止するとお腹がやっぱり丸見えです。五六匹も一緒の時は満員で身動きも出来ませんが、前にも書いたように二列に並んでやはり頭を天に向けて静止していました。けれど一度円網を作るとそれ以来クモ本来の姿に戻って頭を下向きにし、もう変ることはありません。卵のうから第一期生（？）が出てから上手に円網を作るようになるまで、私の庭の子グモは１７日間かかっています。それも夜作って朝とりはらうもの（ワク糸だけ残す）、円網を張りっぱなしの

もの、本日昼（１２：００）現在エッサエッサと円網を作り出すもの、と今のところ三通りあるようです。（網はいずれも完全円網です）

4月16日（土） 曇風強し　朝から強風が吹き荒れて立木まで大きく揺れているので、この様な時子グモの誰かが改めて飛んだりしないかと様子を見てみました。今まで地表より１m位のところに一枚の葉に一匹ずつ住居を作っていた子グモのうち同じ所に頑張っていたものが四匹。あとは風がまともに吹きつけない地表より５０cmの所に移り住んでいました。（一番先に卵のうから出てすぐ隣の葉に住居を作った子グモは一番先に円網を作り、そして強風の中でも同じ住居で頑張っていました。）

4月19日（水） 晴　ビジョオニグモの子グモは、まわりの各樹木におのおの分散して独自の生活を始めました。柿の葉も出て来たのでその間にも円網を張っていました。（夜８：００）この場合子グモ自身が再び飛んだのか、柿の幹に糸を流して渡り、それから葉のある枝にたどりついて住居を定めたのか不明なので興味があります。といいますのは最後の頃卵のうから子グモがウロウロ出てて来た時にはもう柿の葉がフサフサと出て来て居りましたので、一番最初にツルツルの枝に取りついた子グモと違って上に高く飛んでもそこに手頃な葉があるので落着く事が出来たでしょうし、今まで見て来たところによると分散と移動とは区別している様に見えるので、はたしてそれが本当かどうかもっと綿密な観察が必要でした。柿の若芽が出始めた頃から油断なく見ていなければならなかったと、今になって残念がっています。

6月13日（月） 晴　アオキに住居をかまえている子グモは一匹になりました。いつの間にか少しずつ姿を消して、それと入れ換りにジョロウグモの子・ナガコガネグモの子・コクサグモの子等が住みついています。これらの子グモ達がアオキの側面・中央部に住んでいるのに、ビジョオニグモの子は一匹だけ上部表面に頑張っています。小さな身体に比べて随分広範囲に住居を変え、網を張っている様でした。

5：00（夕方）知らない内にアオキが刈り込まれてしまいました。飛んで行って見るとビジョオニグモの子が今日新しく住みついた住居のある葉はなくなり、サッパリとしています。泣くにも泣けない気持でした。何時、どんな風にキレ網を張り始めるか楽しみにこのクモの子を観察し続けて来たのですが、残念ながらこれで打ち切らざるを得なくなりました。皮肉にも昨日まで住んでいた住居はそのまま残っていて夜の風にむなしく揺れていました。

クモの生態2題

中平　清
高知県吾川郡春野町芳原600

1. ハンゲツオスナキグモの捕食行動

ヤリグモが、第4歩脚の間に支え持った粘糸をシロカネグモに投げつけたという報告がある。（橋本理市、マネキグモ及びヤリグモの獲物の捕え方、Atypus №30，1963）

これとよく似た行動が、ハンゲツオスナキグモにおいてみられた。1977年に行った実験によって判明したのである。

このクモの網は、畑岸に叢生したリュウノヒゲの根元から地中へ延びたトンネル状の住居を有し、その円形の口縁から左右上下、四方八方に不規則に糸を張りめぐらしたものであった。クモは住居口の近くに平行背位に占坐していた。

このクモの狩る獲物は主に地を這う虫や飛翔力の弱い昆虫などであることは、今までの観察でわかっていたが、その捕獲行動についての実際を見る機会はなかった。そこで試みに、近くにいたイオウイロハシリグモの幼体を網の方へ追いやってみた。追われたハシリグモの体が、不規則糸の1本に触れたと見た瞬間、網主はサッと下りて来た。獲物との距離約1㎝。第4歩脚で、パッパッパッと3回糸を投げかけた。と、ハシリグモは地面に磔されたようになって動かなくなった。ハシリグモを縛りつけた糸には大きな粘球が数珠状に連っていて、その1粒1粒が陽光に輝いた。網主は、動けなくなった獲物に覆いかぶさるようにして噛みついて殺し、地面から剝ぎ取って、口にくわえたまま元の占坐点に帰った。

以上が、3月26日に初めて見たハンゲツオスナキグモの捕虫行動の実相であった。とは言え、この行動は予想外のことであり、どうもあやふやな点があった。特に、〃投げ縄〃動作の観察が不十分であった。そこで、3月30日にイオウイロハシリグモ幼体、4月1日にチュウガタシロカネグモの幼体、4月3日には羽をもぎ取ったオオクロバエを用いて行った追試の結果を総合して、次のようなことを明らかにすることができた。

○　獲物との距離約1㎝の所から捕縄を投げかける。その時、腹部腹面（出糸突起）を必ず獲物に正対させている。獲物の方にきちっと体を向け変えるのである。

○　捕縄は第4歩脚を左右交互に使って投げる。（この点がヤリグモと違う。）歩脚の先端を出糸突起につけて粘糸を引き出し、その脚を獲物の方にツンと突き出す。と、粘糸が跳んで獲物にからみつく。この動作を3〜4回繰り返すと獲物は動けなくなる。

○　捕縄の長さは約1㎝で、その糸には約1㎜間隔に大きな粘球（径約0.1㎜と見た。）が付いており、その粘球と粘球の間には、微小な粘球が7〜10個並んでいる。粘着力は大変強い糸である。

○　動かなくなった獲物に近寄ってもすぐ噛み付くことをせず、再び糸を投げかけることもある。
この糸には微小な粘球がついていることもあるが、付いていないこともある。
※　上の実験に用いたクモは♀の亜成体であった。

2.　オオヒメグモの卵のう保護行動

ヤギ小屋の天井に接してオオヒメグモの網があり、それには１個の卵のうが吊されてあった。そして親グモはこの卵のうに取り付いて盛に尻を左右に振っていた。卵のうの表面に糸をかけていたのである。ところで、この卵のうは、その色調から見て製作中のものではない。つまり、親グモの糸かけ行動は卵のうの仕上げ作業ではないはずなのに、それでも丹念にかけている。どうもおかしな行動である。

よくよく見ると、卵のうの表面に黄色い小さな虫が３匹動いている。アリだ。キイロヒメアリであった。親グモのかけている糸の下には、同じアリが逃げようとしてもがいている。他の３個処にも、それぞれ１匹のアリが既に糸膜で閉じ込められてもがいていた。

アリの閉じ込めが終った親グモは、次のアリを攻撃し始めた。牙で捕え噛みつぶそうとするのだが、何分アリが小さすぎるので噛むことができない。空しい歯がみをするだけであった。そうこうするうちに、アリはポトリと落ちてしまった。

後に残った２匹のアリには気付かなかったのか、クモは卵のうから離れて網に静止した。

以下は私の想像であるが大きな間違いを犯すものではなかろう。卵のうは小屋の天井から約５㎜離れた所にあったが、ヒメアリは網糸を伝い渡って目的物に取り付いたに違いない。天井から卵のうまでの最短距離は、たった５㎜ではあっても、体長２㎜そこそこのアリにとっては、それへの糸は、細い長い危かしい丸木橋同様のものであっただろう。しかし、とにかく、アリは目的物に取り付き、中の卵を奪取する行動を起した。それと気付いた親グモ（体も動作も小さなアリを何によって敵と認めたかも不思議であるが。）は、防御と攻撃を開始した。ところが、上に記したように相手が小さすぎて歯がたたない。そこで取ったのが封じ込め作戦であり、これは見事に功を奏したのである。閉じ込められたアリは、やがて力尽きて干からびてしまうのであろう。

さて、多くのクモの、その卵のうに対する態度には、コガネグモのように、その卵のうを放置して子グモの命運を天にまかせるもの、コモリグモのように卵のうを体に保持して離さないものを両端として、その間にいろいろな様式を見ることができる。

オオヒメグモは、コガネグモとコモリグモの中間にあるものである。すなわち、その卵のうは自分の網に吊してある。しかし、それに体を接して保護しているようなことはほとんど見られない。このクモは、日をおいて３〜４個の卵のうを作ってその生を終る。最後に作られた卵のうは親とは無縁に放置されたものとなるのが普通である。

コモリグモが卵のうを離さない理由の１つに、その子グモには、自力で卵のうを破って外界に出る能力がなく、それには親の助力が必要であることが挙げられる。これに対してコガネグモの卵のうは

２枚貝式で、子グモが孵化して成長すると、その子グモ集団の圧力で、左右の卵のう幕の継ぎ目が裂けて脱出口ができるように作られているのである。しかし、天敵や自然現象に対しては、卵のうの構造と僥倖に頼る以外にないのである。

オオヒメグモの場合は、その卵のうは継ぎ目のない袋状のものであるが、子グモには、この袋に穴を開けて脱出口を作る能力がちゃんと備っている。つまり、親の助けを借りず、放置されていても外に出ることができる。この点はコガネグモに似ているが、天敵に対しては上述の観察例のように、親が力を尽してくれることはコモリグモに近いとすることができる。私が中間的保護様式としたのはこのようなことによるのである。

クサグモの同居グモ

石　山　鉄　幸

クサグモの巣について、筆者は以前から興味を持っていた。クサグモの巣は大きなものは直径が40cm以上もあり、その中に枯れ葉がぎっしりつまっている。その環境は、徘徊性のクモについて良い住み家を与えているのではないかと考えていた。そこで、今年の夏にクサグモの巣を調査した。その結果、９科２０種のクモがクサグモの巣に同居している事をつきとめた。おもに幼生が多く同居しており、幼生のクモの良い住み家となっていた。

調査年・月・日	１９７７年8月２２・２３日
調 査 地	静岡県掛川市倉真
調 査 数	５０個体
調査方法	捕虫網を使ってのビーティング

			個体数
	Uloboridae		
1.	*Miagrammopes orientalis* Bös. et Str.	マネキグモ	1
2.	*Uloborus* sp.	ウズグモの一種	7
	Pholcidae		

3.	*Pholcus crypticolens* Bös. et Str.	ユウレイグモ	2
	Theridiidae		
4.	*Argyrodes fissifrons* (O. P. Cambridge)	チリイソウロウグモ	26
5.	*A. saganus* (Dön. et Str.)	ヤリグモ	5
6.	*Dipoena mustelina* (Simon)	カニミジングモ	4
7.	*Enoplognatha transversifoveata* (Bös.et Str.)	カレハヒメグモ	6
8.	*Theridion sterninotatum* Bös. et Str.	ムナボシヒメグモ	3
	Linyphiidae		
9.	*Ostearius melanopygius* (O. P. Cambridge)	スソグロサラグモ	1
	Mimetidae		
10.	*Ero japonica* Bös. et. Str.	センショウグモ	4
	Oxyopidae		
11.	*Oxyopes sertatus* L. Koch	ササグモ	1
	Thomisidae		
12.	*Philodromus subaureolus* Bös. et Str.	アサヒエビグモ	14
13.	*Tibellus tenellus* (L. Koch)	シャコグモ	3
14.	*Xysticus croceus* Fox	ヤミイロカニグモ	3
	Salticidae		
15.	*Evarcha albaria* (L. Koch)	マミジロハエトリ	1
16.	*Hasarius doenitzi* Karsch	デーニッツハエトリ	10
17.	*Myrmarachne japonica* (Karsch)	アリグモ	18
18.	*Dendryphantes atratus* (Karsch)	カラスハエトリ	10
19.	*Silerella vittata* (Karsch)	アオオビハエトリ	9
	Clubionidae		
20.	*Clubiona* sp.	フクログモの一種	9

以上のクモがクサグモの巣に同居していたわけであるが、幼生のクモがほとんどであった。考えられる事を上げておくと、1つにはクサグモの巣は、弱い幼生のクモが害敵から身を守るのに良い環境なのではないか。2つには冬を越すのに、クサグモの巣が良い環境を与えているのではないか。

クモ（12種）の産卵個数*

松　本　誠　治（杏林大学医学部生物学教室）**

染色体観察の材料とするために採集したクモ卵のうち、１２種のものについてその卵のう内の卵数を数えることができた。以下その結果と、気づいたことを記しておきたい。

種　名（学名のＡＢＣ順）	（和　　名）	１卵のう内の卵数
Chrysso punctifera	ホシミドリヒメグモ	９８
Cyrtarachne bufo	トリノフンダマシ	２６６
Cyrtarachne inaequalis	オオトリノフンダマシ	２４９
		２６８
		３１６
Ogulnius agnoscus	クロヤマジグモ	１５
Pisaura lama	アズマキシダグモ	１１７
Sitticus penicillatus	シラホシコゲチャハエトリ	９
		１５
Strandella quadrimaculata	ヨツボシサラグモ	５５
		６８＋
Tetragnatha squamata	ウロコアシナガグモ	３７
		１１３
Theridion chikunii	バラギヒメグモ	１０８
Theridion rapulum	ギボシヒメグモ	３９
Theridion takayense	タカユヒメグモ	６５
Xysticus croceus	ヤミイロカニグモ	８９
		１０９

表中、オオトリノフンダマシの２６８個と３１６個の卵は、同じ親個体によって産み出されたものである。また、ヨツボシサラグモの６８＋というのは、計数中に卵をいくつか紛失してしまったため、６８個よりも多いことを示している。

トリノフンダマシとオオトリノフンダマシの場合は、卵のう内で孵化したところを、計数したの

---

*　Egg-mass size of twelve species of spiders.

**　MATSUMOTO, Seiji (Dept. Biol., Kyorin Univ., Hachioji, Tokyo 192)

KISHIDAIA No.42 1977, Dec

であるが、孵化幼生にまじって、まだ蜘化していない卵が１０〜２０個まじっているのに気がついた。１週間たったあとでも、幼生の方は元気よく動いていたが、卵の方もそのままで、孵化する様子がなかった。卵のうつからとり出してしまったことが原因で孵化しなかったのか、あるいは、もともと孵化しない卵がいくつかまじっているのか不明である。近藤昭夫氏によると、クサグモでも孵化の時期が異なる卵が、１割ぐらい混じっているという。この場合は、孵化が遅れるが、ちゃんとかえる卵があるということで、トリノフンダマシ、オオトリノフンダマシでも、本来ならばそのうちのいくつかは（あるいは全部は）孵化するのかもしれない。表に記した数は、そのような孵化していない卵も含めたものである。

以上のように簡単な報告であるので、いままで知られている結果の追加として記録するにとどめる。以下、Ａｔｙｐｕｓ（№１〜№６９）とＫｉｓｈｉｄａｉａ（№１〜№４１）に掲載されたクモの産卵数の記録の、著者名・号数・ページを掲げておく。

ＡＴＹＰＵＳ

浜村徹三，（３６）：３９−４７，（５５）：２；城成治，（３２）：１０−１１；川原幸夫，（６８）：３−５；木庭奏，（１１）：２４−２６，（１５）：３−１０；小林好生・関口晃一，（６８）：２９−３８；前田俊英，（６６）：６０；松山紘一，（１４）：９−１３；中平清，（１３）：５−１０，（１７）：１，（２３／２４）：２７−６０，（３８）：２０−２１，（４１／４２）：１５−２３，（４６／４７）：２７−３１，（５５）：２８−３０，（６４）：３６−４５；大利昌久，（２６／２７）：３４−４１，（２８）：１３−１７，（２９）：４−１１，（３０）：１４−２０，（３１）：２３−２６，（３３／３４）：２７−２８，（６３）：１０；下謝名松栄，（２８）：２２−３２，（５５）：６−７；八木沼健夫，（１２）：２１−２５；山川守・熊田憲一，（６０）：３１−５４；山野忠清・木戸敬二，（６４）：２７−３４；吉倉真，（３）：２０−２３，（３８）：１−１７

ＫＩＳＨＩＤＡＩＡ

岸田久吉，（４）：１−４；小林久俊，（２６／２８）：２−５；佐久間良三，（４０）：２２−２５；鈴木勝浩，（４０）：２６−２８，（４１）：２７；高野伸二，（２６／２８）：１１−１３

北緯50度線上報告

西ドイツ　小　野　展　嗣

早いもので、日本を飛び出して半年が過ぎてしまいました。試験の関係で出発の日程が急に決まったので、談話会の皆様と名残り惜しむ余裕もなく失礼致しました。渡独以来の状況は、松本誠治さんが談話会通信誌上に拙い私信の一部を載せて下さったので、少しは想像して戴けたことと存じます。初めは目新しい事物ばかりで、あれも報告せねば、これもお知らせせねば、と思うのですが、数日のうちにとんでもない間違いであることがわかったりして、普遍性のない話をして読んで下さった方を惑わしたり、自分自身恥をかいたりしても、とためらっていたような次第です。しかし、先日こちらで知り合いになった日本人の方（ドイツ滞在1年位）から、「日本にドイツの色なり事情を報告しなければならなかったのに、つい筆不精したせいで、始め新鮮だったいろいろな事物に対する印象が、だんだん慣れるに従って当り前のこととなってしまい、今となってはその時の気持のままで書けないのでたいへん残念だ」というようなことを聞き、なるほどと思ってここにあえて筆を取った訳です。ですからこれは一クモ学生の一経験に過ぎず、多分に私的な点は悪しからず。

―――－―――－―――－―――

昨年（１９７６）の１０月３日に日本をたち、直接マインツに来ました。飛行機はソ連製アエロフロートで、モスクワで乗り換えです。モスクワまでは羽田から約１０時間、途中日本海の群青に見とれるのも束の間、眼下にシベリアの高原の山並が行けども行けども続くようになると、しばらく日本とおさらば。これからいったいどうなろうか、という期待３割・不安７割の重苦しい空気がのしかかってくるような気がしました。そんな思いにおかまいなしにジェットは西へ西へ。ふと気が付くと眼下は褐色から深い緑色へと変っていました。西シベリア低地のはるか上空です。うねうねと気味悪く蛇行するのはオビ川の支流でしょうか。まことに壮大な国土といわねばなりません。羽田を昼の１時過ぎにたって、時差の関係ですが、とうとうモスクワまで日が暮れませんでした。着陸のときはやはり緊張します。足の下には機内に持ち込んだバック一ぱいの標本（計ったら１３Kgありました）それにもう一つのスーツケース（１０Kg）。これには顕微鏡やカメラのわれものが入っています。――要するに私の全財産です。

モスクワの空港で飛行機の窓越しに初めて見た生物は、コウノトリのような大型の鳥、カラスの一種、それにハトでした。気温３～４℃、野外はもう冬でした。機内食は参考のために、昼――鳥肉の煮込み、マッシュポテト、いんげんの煮物、カリフラワー、トマトのサラダ、マリネー、パン、ワイン、紅茶。夜――ビーフステーキ、フライドポテト、グリンピースのバターいため、アスパラガス、レタス、ニンジンのサラダ、鳥とヤシの芽のマヨネーズあえ、パン、ケーキ、紅茶。３時にはアイスクリーム、オレンジジュース。

さて、モスクワで乗り換えてからは3時間でフランクフルト（アム・マイン）空港。現地時間で夜

9時過ぎ、待望のドイツの土を踏みました。迎えに来てくれたドイツ人の車で一路マインツへ。図々しくもその方の好意に甘えて、それから一週間程居候生活をすることになりました。

私が現在居る大学はMAINZのJOhannes Gutenberg-Universität（ヨハネス・グーテンベルグ・ウニベルジテート）といって、多くの学部をもった総合大学です。有名な印刷術を発明したグーテンベルグに由来しているようで、今年で創立５００年、現在（６月１７日〜２６日）その記念祭のまっ最中で、コンサートなどいろいろな記念行事が催されています。５００年といっても途中ナポレオンに閉鎖されたこともあるそうで、実質はもう少し短かいのでしょう。とにかく歴史の重みは感じられます。学科で日本の大学と最も違うのは、神学科の大きいことです。中世の昔、そもそも学問・大学がキリスト教の神学から発生し、教会の管理のもとに運営されたことを考えれば当然と言えば当然です。その他現在では医学科・法学科などが大きな位置を占めています。外国人留学生の数は、例えば先学期（ドイツの修学単位は学期ごと、１学期は半年、１０〜３月を冬学期、４月〜９月を夏学期と呼ぶ）は、合計すると１３００人もの多きです。アメリカ合衆国、フランス、イラン、インドネシアの留学生が多く、日本人は２８人居るようです。

私は先学期から入学した訳ですが、始めは仮入学でドイツ語の講座ばかりとらされ、今年３月の語学試験になんとかパスして、この夏学期から正規の生物学科学生となることができました。日本の大学と違って教養課程はないので、すぐに専門の講義・実習等が始まります。大学の話や大学生の生活等はきりがないので、また機会があった折に触れてご報告するとして、そろそろクモの話をしましょう。

以上のようにドイツでの身分は学生ですが、動物学のブラウン、マーテンス両教授の御好意で、動物学研究室(Institut für allgemeine Zoologie)に籍を置き机を一つもらうことができ、クモの研究にはとても好都合です。ブラウン教授はかってコガネエビグモのグループの分類・系統を詳しく研究され、その中で日本のコガネエビグモのタイプを再記載したことがあり（1965)、日本にいるときから名前を知っていました。八木沼先生とは懇意にされており、私の留学が実現したのもそのおかげです。とても温厚な方です。そしてマーテンス教授はブラウン教授の弟子にあたり、メクラグモの研究では現在世界の第一人者といっても過言ではありません。Tierweet Deutschlandsのシリーズのメクラグモを執筆、今印刷中ですが、厚さ７〜８cmある原稿を見せてもらいました。まだ独身でとても活動家です。私は直接彼に指導をうけ、またいろいろとお世話になっています。また、マーテンス教授は日本へも来たことがあります。

そのような訳で、大学の勉強、クモの研究、ヨーロッパ見学、家庭サービスと、とにかく貧乏暇なし、クモにでもなりたい心境です。

私の渡独の目的のひとつに、フランクフルトにあるゼンケンベルグ博物館に所蔵されている日本のクモのタイプ標本を見ることがあります。Bösenberg及びStrandの有名なJapanische Spinnen(1906)の記載に使われた標本はほとんどがここに保存されているのです。これを見ないことには日本のクモの分類は終わらない、ということがドイツへ私をかりたてた原因の一端と言えるでしょう。実際、１００年も前にデーニッツが日本で採集し、ドイツへ持ち帰った標本を初めて目

のあたりに見たとき、何とも知れぬ興奮が私を包みました。フランクフルトへは何度かかよい、多くの事を学んでいます。今年の8月にはイギリスの世界クモ学会の帰途、大阪の八木沼・西川・田中の各氏がフランクフルトへ寄られ、これらの標本を研究することになっています。きっと多くの新事実が学界へもたらされるでしょう。

さて、話は変わりますが、ここマインツはドイツで最も暖かい所のひとつで、ここを北限としている動物も少なくないという話です。雪はそれほど降りません。緯度からいくと樺太と同じですから、海流の影響がいかに大きいか驚かされます。家の近くに森があって、ときどき散歩がてらクモの観察もしますが、やはりゲホウグモだのトリノフンダマシだのトゲグモだのと南の系統のクモが皆無なので、あまりワクワクしません。それでも石をはぐったその下のくぼみにイノシシグモが潜んでいたり、ワシグモ類でしょうか、黒地に黄金色の斑紋をもったすばらしく美しいクモが飛び出してきたりすると、ついクモ心をそそられてしまいます。ただ日本のように良いクモ図鑑がないので、採集して論文で調べないと名前がわからないので面倒です。そのうち名前を覚えたらいろいろ観察してお知らせしましょう。

ここライン川沿いは有名なワイン産地で、しかもこの辺は中心地。いずれワインのこともいろいろお話ししたいと思いますが、次の機会といたしましょう。まずはご無沙汰のお詫びまで。

（１９７７年6月２２日）

（住所）Rubensallee 42, 6500 MAINZ-Lerchenberg, West Germany

MAINZの中心、Theaterの前から雑踏越しにDom（大聖堂）をのぞむ。右側の木の下あたりの歩道の上に１本の線が引かれてあり、道路の反対側に立っている私の足元までのびる。この線は丁度北緯５０度そのものであり、つまり私は今北緯５０度の線上に立っている。MAINZのDomは１０世紀頃建てられ、古いことで有名。

高山不動というところ

田　中　理　恵

ようやく周囲が春らしくなってきた5月1日、6人のクモ屋さんが西吾野（にしあがの）駅にやってきました。ここは埼玉県でも秩父よりなので、ホームに降りるとさっそく春めいた山が目に入ってきます。駅前広場には、顔振（こうぶり）峠・子の権現（ねのごんげん）・大高山（おおたかやま）など幾つかのハイキングコースを示す表示板がありましたが、この日は遠足の下見という個人的意見のため、高山不動尊コースをとることになっていました。

天候に恵まれいざ出発。駅から少しばかり広い道を下った所にある自転車小屋で、高校生コンビの貞元、吉川両氏が、すでにヌサオニグモを採集。さいさき良いスタートでした。

駅から高山不動尊の登り口までは、でこぼこの車道を歩かねばなりません。この車道片側は山斜面、反対側は沢なのですが、直射日光を受けて乾きに乾いているので、車が通るたびになんともすごい砂ぼこりが舞いあがります。そのためウツギ・ムラサキケマンなどの野草・低木類は、3m位まで砂ぼこりをかぶった状態になっていました。それでも斜面を探ってみると、地表面にはいくらかの湿り気があります。注意してみると、あちこち凹んだ窪みに2〜3cmほどの網がみられました。ナンブコツブグモの網です。表面に近い網は〝こんな状態で虫を捕えることができるのか〟と思われるほど砂ぼこりをかぶっていました。けれどもほとんどの網に、このクモをみつけることができました。ほこりをかぶった草地ではクスミサラグモの網が、陽をあびてよくめだちました。

砂ぼこりを免れた草地で、吉川氏が何やらみつけたようです。イネ科植物の突き出した葉先に小さな丸い塊がみえます。そのままじっとしているところを吉川氏が捕えてみると、ツクネグモでした。足を縮めてしまうとでこぼこした特有な腹部だけがめだって、とてもクモにはみえません。なぜこのような陽を浴びる葉先にいたのでしょう。例の粘着性のある条網を張るためにしては、周囲の草が密生しすぎているようでしたが・・・・。

明るく輝りつけられていた道が急に狭くなり、〝不動尊登り口に来たのだ〟ということがわかりました。登っていくと左手にさきほど通った道や橋が明るくみえます。小屋のわきを通るとき、生け垣にコガネグモ科の円網をみつけました。クモを捜していると先に通過した嶋田氏が捕えたとのこと。網の主はコガタコガネグモでした。

急な坂道はさらに続き、スギ・ヒノキの林がその両脇に続きます。山道はこのような植林地だけでなく、ときおりコナラ・クヌギなどの雑木林をもぬけて行きます。トンネルのようになった林の中では、葉の隙間から少しだけ空がのぞけ、空をおおっている薄い若葉は陽を受けてすけてみえます。そんな林の中で、栗原嬢が葉上からヨツボシサラグモを採集。特に網を張っていたとか、葉をまいていたとかいう様子はありません。そこで一同ガマズミ・ミズキ・アオキなど低木に目をつけて、さっそ

くヨツボシサラグモを捜し始めました。こうしてそれぞれが採集したクモをいざ比べてみると、４つの斑がはっきりしている個体から腹部が黒っぽい個体までさまざま採集でき、改めて色彩の幅広さというものを感じさせられました。

ほかにもクモがいないかと今度は下の方を捜すと、あさい皿状の網をみつけました。幸い捕えた網の主が♀の成体であったので、私の観察したクモはシロブチサラグモ・ユノハマサラグモであることがわかりました。

サラグモを握った手からやっとの思いでクモをカンビンに移し移ししていると、もう嶋田氏は斜面の落ち葉を調べています。木もれ日の丸い影が足もとにちらちらしています。私もゆっくり腰をおろし、おりかさなった落ち葉・朽ち木をごそごそ押しのけていきました。プンと特有な香りが漂い、埋もれてしんなりした落ち葉や枝が現われてきます。ピンセットでかき開ろげてから、しばらく息をころして様子をみていると、小さな生き物が這いまわり始めました。動き出した方を目で追いながら急いでカンビン・吸虫管を引っぱり出します。ほんとうなら赤茶けた落ち葉や土の上なので、コサラ類などはみつけにくいはずなのですが、めざすあめ色の小さなクモたちはゆっくり動いてくれるので、容易に見つけ出すことができます。湿った斜面にしっかり足場をきめ、地面すれすれに屈み込み、クモに狙いを定めて吸いあげる。こうして吸虫管で吸いあげたクモは乾かぬようアルコール漬けし、標本にしてから同定しました。この日私の吸虫管に飛び込んできたクモは、ハタケグモ♂、ザラアカムネグモ♂、ハガタヤセグモ♀と幼生のマシラグモでした。

一事が万事のんびりペースだったため、昼食は途中の休憩所でとることになり、不動尊付近に登着した時はとうに３時をまわっていました。

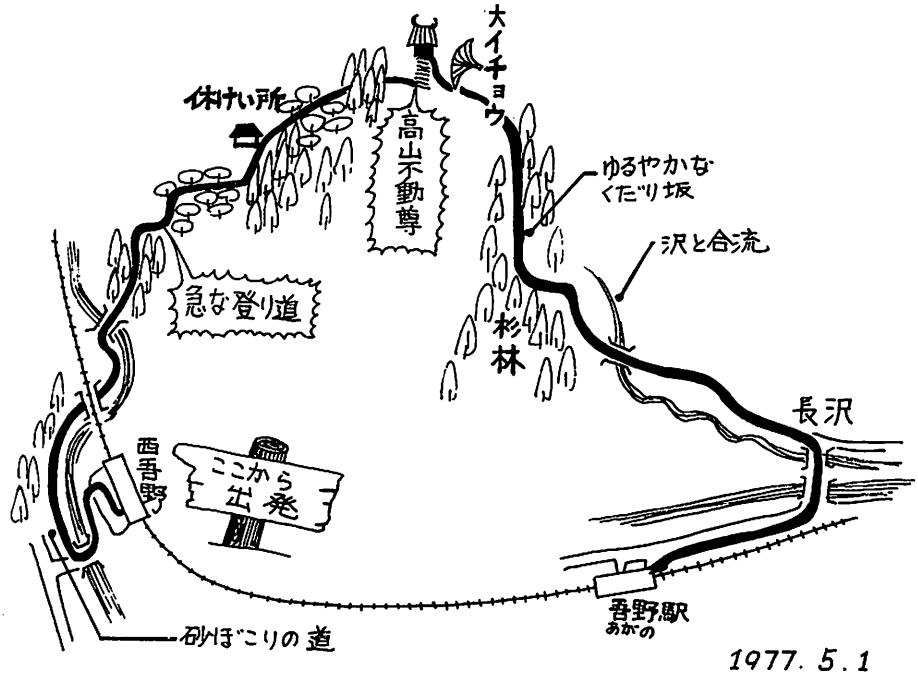
元気な高校生組はここでもおもしろいクモをみつけました。まず目をつけたのは、コガネグモ科のものとみられる円網です。私だったら〝たいしたものではないだろう〟と見すごしてしまいそうな、直径２０cmほどの網。多少横糸が粗いようです。道わきの草むら地上５０cmほどの所に張ってあり、クモのほうはみあたりません。網をささえる糸をたどった所にクモが潜んでいました。腹部両かたがぐんと突き出したツノオニグモでした。次にみつけたのは無斑型のヒラタグモです。不動尊境内でみつけたとのことで、のんびり休んでいた我々も、あわてて柱などにへばりついている平たい住居をはがし始めました。ところが全て斑のあるものばかり。日頃住居のみを見て終ることの多いクモだけに、観察不足なのかもしれません。注意深く捜してみたら意外に無斑型のものもみつかるのではないでしょうか。

境内の大きなイチョウをぐるっと回り、帰りは吾野駅にむかいました。境内からはジャリの車道がゆるやかに続きます。こちらの道はスギ・ヒノキなどの高木下で、さほどほこりません。下草や低木も道脇の斜面にみられます。春らしく林床にはホウチャクソウ・ウマノアシガタ・ナルコユリ、ちょっとかわった形のマムシグサがみられます。このような日陰で湿った所ではムラクモヒシガタグモ・オナガグモ・アシナガグモが観察できました。また、この日、不動尊から吾野へ向う道の両側いたる

所ではカラフトオニグモ・サガオニグモがめだちました。サガオニグモの網を丹念にみてゆくと、体長1cmほどになっている個体や、白帯をつけた網がみられます。両種のほかに、ヨツボシサラグモもかなりの個体数を確認することができました。このへんではこの時期に、これらのクモがめだって現われるのでしょうか。興味あるところです。

帰り道、しばらく歩くと途中から沢が合流してきました。沢にそったガードレールを利用してメガネドヨウグモが、せっせと網を張っています。日やけした顔に西日を浴びながら、みえかくれする先頭の後をたどります。もう駅はまぢか。とぼとぼ歩いていると、さきほどからタチツボスミレなど春の野草をカメラひおさめていたまゆみ嬢が、物足りなそうに脇で一言もらしました。〝ほんとにこの山は鳥が少ないね。〟そういえば、五月というのにどうしてかと思われるほどさえずりを耳にしません。ときおりカラスが飛び出す程度でした。クモにとっては楽園なのかもしれません。いやこの日ばかりはご難な日だったことでしょう。

帰りの電車の中で、6人それぞれ本日の収獲物をひろげ始めました。カンビンを一同にまわす人、確認する人、野帳をひっぱり出す人・・・・。こうして観察会の一日が終りました。



ハエトリグモの分類（Ⅳ）**

――ヨーロッパのアリグモの学名に関する諸問題――

松　本　誠　治（杏林大学医学部生物学教室）*

八木沼健夫博士が大阪のあつまり（年月日不明）で配布された「なぜいろいろな学名ができるか」というパンフレットは，学名の問題を考えるのに大変有益なものである。１種には１つの学名しかないはずのものが，また１つの学名しかあってはならないはずのものが，実際には実に多くの名前が１つの種につけられてしまう。その原因が細かく列挙されている。以下全文を紹介しておきたい。

なぜいろいろな学名ができるか

1. 記載上の問題

1. 記載の誤り（観察の誤り，属の判断の誤り，不完全な記載），2. 雌雄を別種として記載，3. 属のとり方の広狭（見解の相違）　ランパーとスプリッター，4. 属徴の変遷（記載から，タイプから，人為分類と自然分類），5. nomen nudum の使用，6. 原記の綴りの誤り（訂正できる場合とできぬ場合），7. 変異（個体・地理的）を別種・別属とする（種・亜種・品種）

2. 取扱上の問題

1. 破棄されたものの復活（ホモニム・シノニム），2. ホモニム・シノニムによる破棄と先取，破棄されたものの復活，3. 有効属名・学名の発見，4. 忘れられた学名の使用停止，5. 属の統合と分割，6. 見解の相違（同種と見るか別種と見るか）

3. 同定上の問題

1. 同定の誤り（記載の不明瞭・不完全，同定者の判断の誤り），2. 検索表の見方の誤り，3. 暫定的な同定（属・種），4. 既報文献の見落し（記載にも関係する）古い文献の見落し，新しい文献の見落し，5. 標徴のとり方，重視度，6. 記載による同定とタイプによる同定，7. 同定者の知識不足，観察力不十分，8. 標徴の誤認

同定記載には次の注意が必要：十分な材料（♂♀成体），新旧文献の探索，正確な観察，自然分類上の標徴の把握（変異のある形質と変異のない形質）

これらの内容が，具体的に個々の種にどのようにかかわっているかということは，学名の命令者および同定者のそれぞれが，それぞれの考えでその学名を創設し，また選んだということから，実に複

---

* MATSUMOTO, Seiji (Dept. Biol., Kyorin Univ., Miyashita, Hachioji, Tokyo 192)

** A note on the specific names of *Myrmarachne joblotii* and *M. formicaria*.

KISHIDAIA No.42 1977, Dec

雑なものになっている。例えば，ヨーロッパ産のアリグモについても，この複雑な問題はいろいろな形でからんでいるものと思われる。

Roewer (1954) Katalogue der Araneae を見ると，このアリグモについては，次の学名が使われたことがあるとされている。

Aranea joblotii Scopoli, 1763

Aranea formicaria DeGeer, 1778 : Olivier (1789)

Pyrophorus helveticus C.L.Koch, 1846

Pyrophorus siciliensis C.L.Koch, 1846

Pyrophorus venetiarum Canestrini, 1868 : Canestrini & Pavesi (1868)

Pyrophorus flaviventris Canestrini et Pavesi, 1868

Attus formicarius (DeGeer) : Walckenaer (1805, 1825, 1837)

Salticus formicarius (DeGeer):Sundevall(1832), C.L.Koch(1846) Blackwall(1851,1861), Westring(1862), Ohlert(1867), Thorell(1872), Simon(1876), Becker(1882), Dahl(1883), Hansen(1885),Chyzer & Kulczynski(1891), Peckham(1892), Bösenberg(1903)

Attus helveticus (C.L.Koch) : Walckenaer (1847)

Pyroderes formicarius (DeGeer) : Simon (1868)

Pyroderes helveticus (C.L.Koch) : Canestrini & Pavesi (1870)

Pyroderes siciliensis(C.L.Koch):Canestrini & Pavesi (1870)

Pyroderes venetiarum(Canestrini):Canestrini & Pavesi (1870)

Pyroderes flaviventris (Canestrini et Pavesi):Canestrini & Pavesi (1870)

Myrmarachne formicaria (DeGeer) : Simon (1901,1937), Lessert (1910), Palmgren (1936,1943), Locket & Millidge (1951)

Toxeus formicarius (DeGeer) : Smith (1907)

Myrmarachne joblotii (*Scopoli*) : Dahl (1926), Tullgren (1944) Roewer (1954)

またBonnet (1957) Bibliographia Araneorumをみると，*Myrmarachne joblotii*(*Aranea joblotii*も含む)の学名を使用した著者は１７６３年から１９２７年の間に延数にして３名おり，以下同様に（年代：人数を( )内に略記），*Aranea formicaria*（１７７８－１９０２：１９），*Attus formicoides*（１８２６－１８４７：４），*Pyrophorus semirufus*（１８３７－１８７０：８），*Pyrophorus helveticus*（１８４６－１８６８：４），*Pyrophorus siciliensis*（１８４６－１８６８：４），*Pyrophorus austriacus*（１８５２：１），*Pyrophorus venetiarum*(1868－

1869:4), *Pyrophorus flaviventris*(1868—1869:2), *Salticus formicarius*(1804—1935:136), *Attus formicaria*(1805—1867:13), *Attus helveticus*(1847:1), *Pyroderes formicarius*(1868—1870:2), *Pyroderes helveticus*(1868—1870:2), *Pyroderes siciliensis*(1868—1870:2), *Salticus austriacus*(1868—1876:2), *Pyroderes venetiarum*(1870:1), *Pyroderes flaviventris*(1870:1), *Pyroderes semirufus*(1870:1), *Pyrophorus formicarius*(1875:1), *Myrmarachne formicaria*(1901—1938:53), *Toxeus formicarius*(1907:1), *Myrmarachne austriaca*(1919:1), *Myrmarachne semirufa*(1919—1928:2)となっている。Bonnet 自身は*Myrmarachne formicaria*を有効としている。

Roewer(1954)及びBonnet(1957)の後の文献のいくつかでは、Tyshchenko(1971)が*Myrmarachne joblotii*を，Miller(1971)とLocket, Millidge & Merrett(1974)が*Myrmarachne formicaria*を使用している。

これらのうち，属の変遷については，八木沼博士の指摘のうち，1－3．属のとり方の広狭，1－4．属徴の変遷，2－5．属の統合と分割，3－5．標徴のとり方，などが深く関係していると考えられる。また，種名 —— すなわち種 —— の同物異名性については，1－7．変異を別種・別属とする，2－6．見解の相違，3－4．既報文献の見落し，3－5．標徴のとり方，3－6．記載による同定とタイプによる同定，などによるものと考えられる。

現在，このヨーロッパのアリグモの学名をどれにするかという問題に対しては，属の定義や先取権を考えると，*Myrmarachne joblotii*(Scopoli, 1763)が妥当のようであるが、問題は複雑である。Bonnet(1957)はp.3004の脚注(215)で，Scopoli(1763)の*Aranea joblotii*は確かに*Myrmarachne formicaria*(DeGeer,1778)であるけれども，150年以上も忘れられていたわけであるし，*formicaria*というよい表現の名のかわりに，*joblotii*を使うのは適当でなく，また先取権は*A. joblotii*にあるが時効の規則によって*M. formicaria*を使用するに値する，と述べて*M. formicaria*を有効としている。ここで問題になるのは，150年間忘れられていたとしていることである。Dahl(1926)，Tullgren(1944)，Roewerが*M. joblotii*(Scopoli, 1763)を有効として，それぞれ，*M. formicaria*の名をシノニム表の中に入れていることについてはどのように考えているのかが疑問になる。Bonnet(1957)以後，Tyshchenko(1971)は文献表にBonnet(1957), Roewer(1954)を掲げた上で，*M. joblotii*を有効として*M. formicaria*をその新参シノニムとしている。なおMiller(1971)は*M. formicaria*を使用しているが，シノニムについては明記していない。

しかしながら，新しい問題がLocket,Millidge & Merrett(1974)によって提出された。彼らはp.31において，本種(*M. formicaria*)の名をScopoliの*Aranea joblotii*とするのは正しいことではないと思う；Scopoliの記載は，Mr. D. J. Clerck (Brtish

Museum, Natural History)によれば，*Leptorchestes berolinensis*（C. L. Koch, 1846）に等しいとされる；この*L. berolinensis*は，Scopoli も簡単に入手できた種である；またScopoli（1763）のものには図が1つもないが，DeGeer（1778）の*Aranea formicaria*の記載は、図もよく描かれており，疑問なく種の創設をみとめることができる；また190年間*M. formicaria*を使用してきたことについても支持をする，と述べている。もしこのClerkの意見が正しいとすれば，この2つの学名についての問題は解決されてしまう。しかし，いままで多くの学者が同一種としてきたという事実は，どう解決すればよいのだろうか。Bonnet のいう「時効の規則」――150年間忘れられていた事実のための――とは、1958年に改訂された命名規約でもとりいれられ明記されているが ―第23条（a），（b）―その中の50年もしくは状況によってはそれ未満という期間の解釈には2通りを考えることができる。

このようにみていくと，1758年以来作られ続けてきた種名に関する問題が，いかに複雑であるかを痛感せざるを得ない。特に1800年代に各々の国の学者が，各々命名してきたような一般的な種の方が，この問題を多くかかえているように思う。*Evarcha flammata*と*E. falcata*，*Euophrys maculatus*と*E. frontalis*なども，*M. joblotii*と*M. formicaria*と同じ問題をもつ例であるといえる。このようなヨーロッパ産の一般的なクモが，日本で発見された場合，種によっては複雑な事情がからんでいることを考えると，その種に対して使用すべき学名を，我々日本人がはたして云々できるのかが疑問に思われて，悲感的になってしまうのである。これらのことを，少しでも好転させるためには，日本新記録として報告する際には，少なくとも他の人が同定できるだけの記載・図等の資料と，使用した学名の根拠になった文献を明らかにする必要があると考える。

以上，ヨーロッパのアリグモを例に，学名に関する問題をいくつかひろいあげた。

参考として，2・3の文献から，ヨーロッパ産アリグモの図を転載しておく。

引用文献（ページは，該当部分）

Bonnet, P. (1957) Bibliographia Araneorum. 2:3002–3005, Toulouse

Dahl, F. (1926) Spinnentiere oder Arachnoidea. I: Springspinnen (Salticidae). *Die Tierwelt Deutschlands*, 3:23–24

Locket, G.H., A.F. Millidge & P. Merrett (1974) British Spiders. 3:31, The Ray Society (London)

Miller, F. (1971) Pavouci-Araneida: 131&133, *in* (Daniel, M & V. Černý ed.: Klíč Zvířeny ČSSR, 4, Academia (Prague)

Roewer, C.F. (1954) Katalog der Araneae. 2–b: 940–941, Inst. royal Sci, nat. Belgique (Bruxelles)

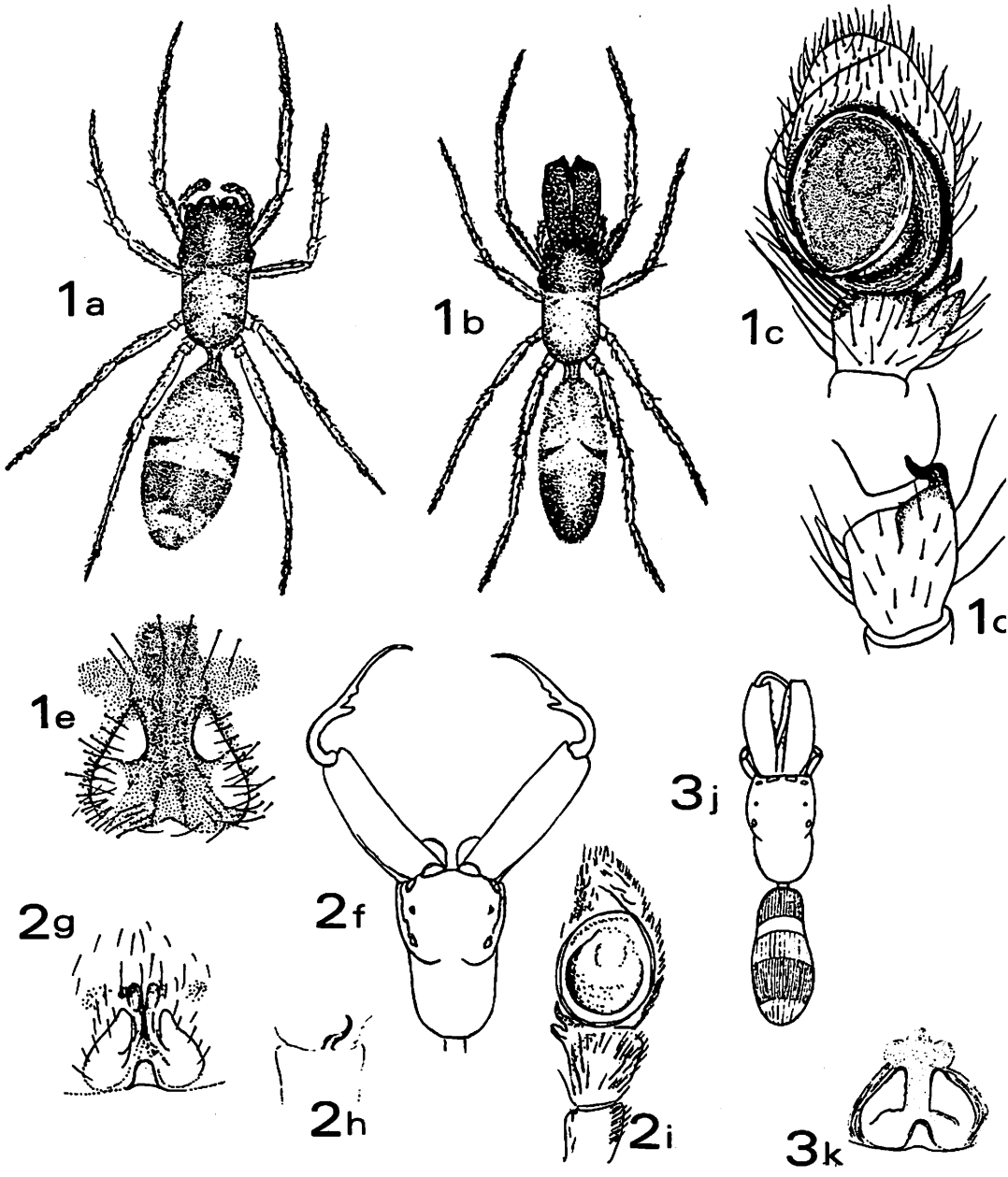
Tyshchenko, V.P. (1971) Determination of spiders in the European

part of USSR.:78 Sciene publ. (Leningrad)
Tullgren,A. (1944) Svensk Spindelfauna, 3. Araneae, Fam. 1—4. Salticidae, Thomisidae, Philodromidae och Eusparrassidae.: 17—18, Entomologiska Föreningen (Stockholm)

（付録）ハエトリグモの分類（Ⅲ）——日本産稀少ハエトリグモについての資料——（Kishidaia, (41) : 15—20, 1977）における引用文献：——

Bonnet,P. (1955—1959) Bibliographia Araneorum, 2:1—5508, Toulouse
千国安之輔（1941）日本アルプス山系の蜘蛛．：1—163, 21 pls. 信濃教育会南安曇部会（松本）
Prószyński, J. (1970) The systematic problems of Salticidae in a light of the survey of major collections of the world. *Bull. Mus. nation. hist. nat.* Ser. 2, 41(suppl. 1)：161—165
——(1971) Problems of classification of Salticidae(Aranei). *Proc. Arachnol. Congr. internation.* (Brno, 1971)
——(1973) Systematic studies on east palaearctic Salticidae, Ⅱ. Redescriptions of Japanese Salticidae of the zoological Museum in Berlin. *Annales Zoologici*, 30(5) :97—128.
Roewer,C.F. (1954) Katalog der Araneae, 2—b : 927—1751, Inst. royal Sci. nat. Belgique (Bruxelles)
斉藤三郎（１９５９）原色蜘蛛類図説．：1—194，28pls. 北隆館（東京）
八木沼健夫（１９７６）プルシンスキー博士による日本のハエトリグモ科の研究経過．第５回三会合同例会（１９７６・１２・２６，東京）講演要旨，：４（本文１８頁下から５行目の１９７７は１９７６と訂正する）

本文と文献表が分離して掲載されたことについて，深くおわび申し上げる。



1. *Myrmarachne formicaria*〔Locket, G. H. & A. F. Millidge (1968) British Spiders I. より〕 a. ♀, b. ♂, c. ♂palp, d. ♂palpの脛節側面, e. Epigynum
2. *Myrmarachne joblotii*〔Tullgren, A. (1970) Svensk Spinderfauna, 3. Araneae, Fam. 1—4.より〕 f. ♂頭胸部, g. Epigynum, h. ♂palpの脛節側面, i. ♂palp
3. *Myrmarachne formicaria*〔Miller, F. (1971) Pavouci-Araneida in : Klič Zvířeny ČSSR, 4より〕 j. ♂, k. Epigynum

都 会 の ク モ

I. 千代田区３番町宮内庁分室庭園のクモ

新 海 栄 一

東京都（島部を除く）では今までに約３８０種のクモが記録されているが、これらの種類は八王子市、青梅市、五日市町、日の出町、奥多摩町、桧原村に含まれる都下の山間部において記録されたものが大部分を占めている。しかし都内（２３区）にも自然環境が残されている場所は多く、このような所は当然かなりのクモが生息していると考えられる。たとえば皇居、自然教育園、明治神宮、新宿御苑その他の神社、公園などがあげられる。１９７４年より、そのような公園、緑地を調査されてこられた大野正男氏は昨年（１９７６年）、１０６種のクモを記録し「都市環境下におけるクモ類・・・後略」と題して発表されている。また山川守氏も本誌No.３８に自然教育園内のペートトラップから採集されたクモ、２８種を記録しているように、都会にもかなりのクモが分布していることが明らかになっている。

筆者は昨年一年間、常陸宮殿下の御好意によって、表題の千代田区３番町にある宮内庁分室の庭園のクモを調べる機会に恵まれた。分室は皇居の近くとはいえ周囲を建物、道路に囲まれ、まさに大都会の中心部という感じの所にあり、調査開始当時は２０種程度と予想していたのであるが、結果的には５２種類が確認された。以下にその時のリストを報告する。

リスト作成にあたり、調査の機会を与えられ、さらに分室内外の多数のクモを採集して下さいました常陸宮正仁親王殿下に、深く感謝の意を表します。また土壌性クモ類の抽出に当っては、日本私学教育研究所の関下俊英研究部長、杏林大学の松本誠治氏に御協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

Dictynidae

1. *Dictyna foliicola* Bösenberg et Strand　　ヒナハグモ

アジサイの葉上に造網していたものを採集。植物の葉上以外に、板塀や河原の石の下などに見られる。

2. *Lathys puta* (O.P.Cambridge)　　キイロカレハグモ（東京新記録）

コンクリート塀の隅にボロ網を張っていた。本来は樹の表面に造網する。学名には問題があり多くのシノニムがある。

Oecobiidae

3. *Oecobius annulipes* Lucas　　チリグモ

屋内性のクモであるが今回は前種同様コンクリート塀の隅に多く見られた。東京では都下市町村部より都内に多く分布する。

Segestriidae

4. *Ariadna lateralis* (Karsch) ミヤグモ

石灯篭や庭石のすき間に住居を造り、入口より短い触糸を引く。山地から都会まで広く分布している。樹木の割れ目、神社、寺院の建造物のすき間にも造網する。

Pholcidae

5. *Spermophora senoculate* (Dugès) シモングモ

屋内の暗所に不規則網を張る。都内に多く生息。

Mimetidae

6. *Ero japonica* Bös. et Str. センショウグモ

個体数は多くないが、都内では比較的よく採集される。

Theridiidae

7. *Dipoena punctisparsa* Yaginuma シモフリミジングモ

アリを捕食する。山間部では普通に見られるクモであるが、大野(1976)の記録にも見られることから、都内においてもかなり広範囲に分布していると思われる。

8. *Episinus nubilus* Yaginuma ムラクモヒシガタグモ

都下山間部に分布する。都内では初めての記録である。網性、捕食習性等は不明。

9. *Stemmops nipponicus* Yaginuma スネグロオチバヒメグモ

土壌性クモの代表的種類。落葉・倒木・石の下等に不規則網を張る。東京都全域に広く分布している。

10. *Achaearanea tepidariorum* (C. Koch) オオヒメグモ

11. *Theridion kompirense* Bös. et Str. コンピラヒメグモ

雑木林内の下草やササの葉裏に不規則網を張る。今回は7月17日に樹枝間に造網していたものを一頭採集した。都内ではほとんど見られない。

12. *T. pinastri* L. Koch ムナグロヒメグモ

石灯篭のすみに不規則網を張る。個体数は多い。

Linyphiidae

13. *Linyphia oidedicata* (Helsdingen) ヘリジロサラグモ

山地平地に多く分布する。サラグモ科の中では最も普通に見ることができる。

14. *Ostearius melanopygius* (O.P.Cambridge) スソグロサラグモ

落葉中、石の下、倒木の下にシート網を張る。都内以外では採集されていない。

15. *Meioneta obliqua* Oi ナナメケシグモ(東京新記録)

地面の凹みにシート網を張っていた。7月17日採集。

Araneidae

16. *Araneus ventricosus* (L. Koch) オニグモ

17. *A. mitificus* (Simon) ビジョオニグモ

平地に多いクモ。人家の周囲に好んで生息する。東京都全域に分布する。

18. *Neoscona mellotteei* (Simon) ワキグロサツマノミダマシ

19. *N. scylla* (Karsch) ヤマシロオニグモ

18，19とも東京都全域に広く分布している。

20. *Argiope minuta* Karsch コガタコガネグモ

個体数は少ないが、都内各地で採集されている。

21. *Nephila clavata* L. Koch ジョロウグモ

22. *Cyclosa octotuberculata* Karsch ゴミグモ

21，22とも東京都全域に広く分布している。ゴミグモの方が個体数はかなり少ない。

Tetragnathidae

23. *Tetragnatha praedonia* L. Koch アシナガグモ

24. *T. squamata* Karsch ウロコアシナガグモ

広葉樹の葉の表面に円網を張ることが多い。平地に多いクモである。

Urocteidae

25. *Uroctea compactilis* L. Koch ヒラタグモ

屋内性のクモであるが、庭石や石灯籠にも多数造網している。

Agelenidae

26. *Agelena limbata* Thorell クサグモ

27. *A. opulenta* L. Koch コクサグモ

オオヒメグモ、ジョロウグモとともに都内で最も普通に見られるクモである。

28. *Coelotes luctuosus* L. Koch メガネヤチグモ

屋内造網性のクモ。ヤチグモの仲間では最も都会に適応している。

Lycosidae

29. *Pardosa astrigera* L. Koch ウヅキコモリグモ

学名は従来*Pardosa T-insignita*が使われていたが、本年（1977）八木沼氏により*P. astrigera*に変更された。

30. *P. laura* Karsch ハリゲコモリグモ

31. *Pirata japonicus* Tanaka ヤマトコモリグモ

上記3種とも都内では普通に見ることができる。

Thomisidae

32. *Misumenops tricuspidatus* (Fabricius) ハナグモ

33. *Oxyptila decorata* Karsch キハダカニグモ

個体数は多くないが、都全域に広く分布している。

34. *Oxyptila* sp. キハダカニグモの一種

土壌性の小型のカニグモである。全国各地の土壌より発見されている。

35. *Philodromus subaureolus* Bös. et Str. アサヒエビグモ

36. *Pistius truncatus* (Pallas) ガザミグモ

37. *Tibellus tenellus* (L. Koch) シャコグモ

36，37とも個体数は少ないが、都内に広く分布しているようである。

38. *Tmarus rimosus* Paik セマルトラフカニグモ

同属のトラフカニグモとは季節的にすみ分けている。都内にはかなり分布している。

39. *Xysticus* sp. カニグモの一種

カニグモ属は本種が一頭採集されただけである。

Salticidae

40. *Carrhotus xanthogramma* (Latreille) ネコハエトリ

41. *Dendryphantes atratus* (Karsch) カラスハエトリト

草上を徘徊する。都内では比較的よく採集される。

42. *Hasarius adansoni* (Audouin) アダンソンハエトリ

屋内性のクモ。東京での記録は極めて少ない。

43. *Jotus abnormis* Bös. et Str. チャイロアサヒハエトリ

7月上旬4頭頭採集されているが、それ以外は見つからなかった。

44. *Menemerus confusus* Bös. et Str. シラヒゲハエトリ

45. *Plexippus setipes* Kársch ミスジハエトリ

44，45とも屋内徘徊性のクモ。ヨダンハエトリは都全域で普通に採集される。

46. *Silerella vittata* (Karsch) アオオビハエトリ

地表徘徊性のクモ。個体数は多い。

47. *Myrmarachne japonica* (Karsch) アリグモ

草上、葉上を徘徊する。都全域に広く分布している。

Clubionidae

48. *Clubiona japonicola* Bös. et Str. ハマキフクログモ

細長い葉（イネ、カヤ他）を巻いて住居を作る。分布の多少はその付近の植生による。

49. *Orthobula crucifera* Bös. et Str. オトヒメグモ

土壌中及地表を徘徊する。採集記録は都内の方が多い。

50. *Phrurolithus pennatus* Yaginuma ヤバネウラシマグモ

7月下旬から8月上旬にかけて大量に見られた。土壌中及地表を徘徊する。

Ctenidae

51. *Anahita fauna* Karsch シボグモ

地表徘徊性のクモ。都全域に普通に分布している。

Gnaphosidae

52. *Drassodes oculinotatus* Bös. et Str. チャクロワシグモ

地表徘徊性のクモ。採集記録は多くない。

飛島・粟島のクモ

吉田　哉

飛島・粟島とも日本海上に浮かぶ孤島である。両島とも生物地理学上において注目され、植物・鳥類・昆虫類においては従来からかなり詳しく調査され、最近それぞれ学術調査の報告がなされている。しかし、クモ類においては調査が立ちおくれ、これまで、飛島では３４種・粟島では４８種が記録されているにすぎない。筆者は両島へ渡りクモ類を採集、飛島２７種・粟島２９種とわずかではあるが記録したので報告する。なお、従来の記録と合わせて、飛島で５１種・粟島で５７種が記録されたことになる。

飛島（山形県酒田市）　１９７２年８月７日～１０日

1.	*Uloborus tokyoensis* Kishida	トウキョウウズグモ
2.	*Achaearanea tepidariorum* (C.Koch)	オオヒメグモ
3.	*Ariamnes cylindrogaster* Simon	オナガグモ
4.	*Dipoena mustelina* (Simon)	カニミジングモ
5.	*Theridion rapulum* Yaginuma	ギボシヒメグモ
6.	*Neoscona doenitzi* (Bös.et Str.)	ドヨウオニグモ
7.	*N. scylla* (Karsch)	ヤマシロオニグモ
8.	*N. scylloides* (Bös.et Str.)	サツマノミダマシ
9.	*Argiope bruennichii* (Scopoli)	ナガコガネグモ
10.	*A. minuta* Karsch	コガタコガネグモ
11.	*Cyclosa laticauda* Bös.et Str.	キジロゴミグモ
12.	*Nephila clavata* L.Koch	ジョロウグモ
13.	*Leucauge subblanda* Bös.et Str.	コシロカネグモ
14.	*L. subgemmea* Bös.et Str.	キララシロカネグモ
15.	*Agelena limbata* Thorell	クサグモ
16.	*A. opulenta* L.Koch	コクサグモ
17.	*Tegenaria domestica* (Clerck)	イエタナグモ
18.	*Misumenops japonicus* (Bös.et Str.)	コハナグモ
19.	*M. tricuspidatus* (Fabricius)	ハナグモ
20.	*Xysticus saganus* Bös.et Str.	オオヤミイロカニグモ
21.	*Carrhotus xanthogramma* (Latreille)	ネコハエトリ
22.	*Jotus difficilis* Bös.et Str.	マガネアサヒハエトリ
23.	*Marpissa magister* (Karsch)	オスクロハエトリ
24.	*Myrmarachne innermichelis* Bös.et Str.	ヤサアリグモ

KISHIDAIA No.42 1977, Dec

25.	Salticidae gen sp.	ハエトリグモの一種
26.	*Chiracanthium japonicum* Bös.et Str.	カバキコマチグモ
27.	*Phrurolithus nipponicus* Kishida	ウラシマグモ

粟島（新潟県岩船町）　1973年7月29日～8月1日

1.	*Achaearanea tepidariorum* (C.Koch)	オオヒメグモ
2.	*Ariamnes cylindrogaster* Simon	オナガグモ
3.	*Theridion japonicum* Bös.et Str.	ヒメグモ
4.	*T. rapulum* Yaginuma	ギボシヒメグモ
5.	*Araneus ventricosus* (L.Koch)	オニグモ
6.	*Neoscona doenitzi* (Bös.et Str.)	ドヨウオニグモ
7.	*N. mellotteei* (Simon)	ワキグロサツマノミダマシ
8.	*N. scylla* (Karsch)	ヤマシロオニグモ
9.	*Argiope amoena* L.Koch	コガネグモ
10.	*A. bruennichii* (Scopoli)	ナガコガネグモ
11.	*A. minuta* Karsch	コガタコガネグモ
12.	*Cyclosa octotuberculata* Karsch	ゴミグモ
13.	*Cyrtarachne bufo* (Bös.et Str.)	トリノフンダマシ
14.	*Gasteracantha kuhlii* C.Koch	トゲグモ
15.	*Nephila clavata* L.Koch	ジョロウグモ
16.	*Leucauge subblanda* Bös.et Str.	コシロカネグモ
17.	*L. subgemmea* Bös. et Str	キララシロカネグモ
18.	*Tetragnatha caudicula* (Karsch)	トガリアシナガグモ
19.	*Agelena limbata* Thorell	クサグモ
20.	*Dolomedes sulfureus* L.Koch	イオウイロハシリグモ
21.	*Oxytate striatipes* L.Koch	ワカバグモ
22.	*Tibellus tenellus* (L.Koch)	シャコグモ
23.	*Tmarus rimosus* Paik	セマルトラフカニグモ
24.	*Carrhotus xanthogramma* (Latreille)	ネコハエトリ
25.	*Evarcha albaria* (L.Koch)	マミジロハエトリ
26.	*Jotus difficilis* Bös.et Str.	マガネアサヒハエトリ
27.	*Dendryphantes atratus* (Karsch)	カラスハエトリ
28.	*Chiracanthium japonicum* Bös.et Str.	カバキコマチグモ
29.	*Clubiona vigil* Karsch	ムナアカフクログモ

山梨県山中湖村旭ケ丘のクモ

——あっちこっちのクモの一環として——

熊　田　憲　一

採集年月日　1974年5月8日・1976年3月23日・1977年6月2・3日

採　集　地　主として山中湖畔旭ケ丘富士急管理別荘地及びその周辺

1.	*Uloborus varians* Bös. et Str.	ウズグモ
2.	*Pholcus opilionoides* (Schranck)	タイリクユウレイグモ
3.	*Chrysso punctifera* (Yaginuma)	ホシミドリヒメグモ
4.	*Dipoena mustelina* (Simon)	カニミジングモ
5.	*Achaearanea tepidariorum* (C. Koch)	オオヒメグモ
6.	*Theridion angulithorax* Bös. et Str.	ツリガネヒメグモ
7.	*T. chikunii* Yaginuma	バラギヒメグモ
8.	*T. pinastri* L. Koch	ムナグロヒメグモ
9.	*Labulla contortipes* (Karsch)	アシヨレグモ
10.	*Linyphia clathrata* Sundevall	コウシサラグモ
11.	*Neolinyphia fusca* Oi	クスミサラグモ
12.	*N. japonica* Oi	ツリサラグモ
13.	*N. angulifera* (Schenkel)	ハンモックサラグモ
14.	*Prolinyphia longipedella* (Bös. et Str.)	アシナガサラグモ
15.	*Cresmatoneta mutinensis* (Canestrini)	アリサラグモ
16.	*Nematogmus sanguinolentus* Bös. et Str.	チビアカサラグモ
17.	*Araneus fuscocoloratus* Bös. et Str.	ヤミイロオニグモ
18.	*A. viperifer* Schenkel	カラオニグモ
19.	*Cyclosa argenteoalba* Bös. et Str.	ギンメッキゴミグモ
20.	*C. atrata* Bös. et Str	カラスゴミグモ
21.	*Coelotes modestus* Simon	ヤマヤチグモ
22.	*Pardosa laura* Karsch	ハリゲコモリグモ
23.	*P. brevivulva* Tanaka	ヤマハリゲコモリグモ
24.	*Misumenops japonicus* Bös. et Str.	コハナグモ
25.	*Synaema takashimai* (Uyemura)	アマギエビスグモ
26.	*Tmarus piger* (Walckenaer)	トラフカニグモ
27.	*Pellenes ususudi* Yaginuma	ウススジハエトリ

このほかに不明種数種

KISHIDAIA №42 1977, Dec

コホラヒメグモと卵のう

高橋米夫

青森県夏泊半島立石洞でクモを採集した折に、卵のうをもったコホラヒメグモを観察することができた。卵のうはコモリグモと同様糸イボにつけているが、第4脚の跗節で卵のうを両側からはさむようにして運ぶのが観察された。卵のうを保護している間は第4脚は歩行に役立っていないことになる。洞内のゴロゴロした石の裏などにじっとしていた。三爪類ではあるが、網は確認できなかった。立石洞で採集した♀4個体がつけていた卵のうの卵数を調べたところ次の結果を得た。

25-Ⅶ-1977の2個体・・・ 53個・67個　　11-Ⅸ-1977の2個体・・・ 37個・53個

「ひぶがし」追録

小野展嗣

筆者は前号DRAGLINE欄に沖永良部島に「ひぶがし」というクモの俗称があることを報告したが、その後柳沢善吉氏の論文中に興味ある事項を見出したので追録しておく。(柳沢善吉：クモの語源、語義について、ATYPUS(56)1−8,1971)。それには国頭(多分沖縄の)にクバ・ガシ(Kuba-gasi),また同じ沖縄の首里にもクバ・ガシというのがあることが採録されてある。沖永良部のものと「ガシ」の部分が共通し、地理的にみて同語源であろうことが示唆される。ただし柳沢氏の論文中に(安田徳太郎氏の稿による)、国頭の方の祖形語はレプチャのtŭn-gryŏn(ツン・グリョン——クモの一種)で、それがtum-garyi→tum-gari→kuba-gasiと変化したもので、それに対して首里の方のはチベットのhkel(ケル——糸をつむぐ、クモの糸をかける)が祖形語となっており、それがkal→gasiと変化したものでガシは「クモの巣」を意味することが記されてある。同じ地方の同じクバ、ガシの語源が違うというのは素人にはどうも理解しがたいが、もしその説が言語学の上で正しければ沖永良部のガシはどちらなのだろうか。筆者が沖永良部の一人のおばさんから聞いたところでは、ヒブ・ガシは「クモの巣」ではなく「クモ」又は「オオジョロウグモ」を示すようだ。また「ヒブ」というのは九州各地にみられる「コブ」という俗称にどこか相通ずるような気がする。詳細は言語学に待たなければならないが、俗称の採録ぐらいは我々にも出来るように思う。クモの採集のかたわら、こういう「クモ」の俗称の採集もまた楽しいものではないだろうか。

クモの産卵回数について

鈴木勝浩

今までの飼育観察で、1回の交接で数回産卵するクモを数種みつけることができました。

2回のクモ・・・ヤホシヒメグモ・ヒノマルコモリグモ・カガリビコモリグモ・シラヒゲハエト

リグモ・オオハエトリグモ

3回のクモ・・・ヤマトコノハグモ・ウヅキコモリグモ・オオヒメグモ

このほか、今飼育を続けているハエトリグモ科sp.は、今年の5月18日に第1回目の産卵をして以来、10月25日までに8回産卵しました。今後も、より多くのクモを観察していきたいと思います。

三宅島にいたオダカグモ

鈴木勝浩

三宅島で今年の8月3日、ススキなどの草の茂っているところで、♀♂同居していたオダカグモを5組ほど採集することができました。いずれもススキの葉裏に簡単な糸を張っていました。また10びきとも1株のススキにいました。

イソコモリグモとイシカリコモリグモ

高野伸二・新海栄一・熊田憲一

本年(1977)5月13日、北海道根室市の髙田勝氏より春国岱の海岸で大型のコモリグモが採集されたという連絡が入ったので、早速髙野が根室に向い確認を急いだところ、本州の日本海沿岸(太平洋岸では1回採集されているのみ)に分布しているイソコモリグモと考えられるクモであった。しかしイソコモリグモの北海道での記録はなく、しかもオホーツク海岸ということもあり決定をひかえ、帰京後イソコモリグモの原記載を調べたところ文中に近似種イシカリコモリグモ(旧イシカリドクグモ)の名を見い出した。この時点において髙野より標本を渡された新海が、イソコモリグモ原記載及標本、イシカリコモリグモ原記載と照合した結果、根室のコモリグモはイシカリコモリグモであり、さらにイソコモリグモと同一種であることが判明したが、なおまだイシカリコモリグモ♂の採集を待って発表することになった。7月12日、熊田は春国岱の海岸で♂亜成体を採集することに成功し、飼育を続けたところ8月中旬最終脱皮を終えて成体となった。ここに♀♂標本がそろい、上記資料との検討の結果イソコモリグモとイシカリコモリグモは、多少の大きさと斑紋の違いはあるが同種であることにまちがいなく、いずれ改めて報文を発表する予定である。なお学名は命名規約上、*Lycosa ishikariana* (Saito) を使用せざるを得ないが、和名はイソコモリグモを残したいと考えている。

―DRAGLINEの記事を募集しています。―

あなたの気がついたこと、何でもかまいません。記事をお寄せ下さい。一つの大きな報告にならない短報のコーナーです。このコーナーに限って原稿用紙でなくてもかまいません。(葉書1枚にザッと書いて5〜10行ほどになります。)

東京蜘蛛談話会観察会報告１９７６年一夏一

伊豆半島の真正クモ類*

新　海　栄　一**

伊豆半島のクモに関する正確な記録を最初に報じたのは、植村利夫・高島春雄の両氏で、「初夏の下田の蜘蛛」と題して、高島氏採集、植村氏同定による２４種がActa arachnologica 第1巻4号（１９３６）に発表されている。その後5年の間に、植村（１９３７）、加藤・高島（１９３９）・（１９４０に３報）、関口（１９４０）、辻（１９４０）の諸氏の報文が続けて発表されたが、１９４１年の高島氏の「伊豆下田の蜘蛛追加」を最後に、現在まで３６年間、一つの採集記録も報告されていない。

東京蜘蛛談話会では１９７６年8月２日から４日まで、恒例の夏期合宿を伊豆半島石廊崎及天城峠において行ない、２４科１３２種のクモを採集できたので、ここに伊豆半島のクモの戦後の第１報として発表する。

採　集　者　：　小澤實樹、小野展嗣、萱嶋泉、栗原輝代子、佐藤幸子、新海栄一、高野伸二、
（敬称略）　　長島忠義、並木敏一、松本誠治。

目　　録

◎採集観察地域略号及年月日

A：石廊崎　2～3－Ⅷ－１９７６　　C：下田市稲梓　4－Ⅷ－１９７６

B：天城トンネル出口付近　2－Ⅷ－１９７６　　D：河津町梨本　4－Ⅷ－１９７６

◎齢期表示記号解説　地域略号のみ（一年中各世代がいる）　齢期表示のみ（全地域に生息）

♀♂（♀♂成体）♀－1（♀亜成体）♀.－1（♀成体と亜成体）－2～3（後2～3回脱皮で成体になる幼生）＋2～3（2・3齢幼生）♀♂～＋3（成体から＋3まで各世代）

CTENIZIDAE

1. *Ummidia frugaria* (Dönitz)　キノボリトタテグモ〔A〕

ATYPIDAE

2. *Atypus karschi* Dönitz　ジグモ〔A〕
3. *Calommata signatum* Karsch　ワスレナグモ〔C（＋4～5）〕

AMAUROBIIDAE

4. *Amaurobius flavidorsaris* Yaginuma　セスジガケジグモ〔B（－3）〕

---

* A list of the spiders from the Izu peninsula

** Eiichi Shinkai (6-6, Honda 1 chome, Kokubunji-shi, Tokyo 185, Japan)

UROBORIDAE

5. *Uloborus sybotides* Bös. et Str. カタハリウズグモ 〔C(♀.−1)〕
6. *U. tokyoensis* Kishida トウキョウウズグモ 〔A(♀)〕
7. *U. varians* Bös. et Str. ウズグモ 〔A,C,D(♀♂.+2〜3)〕

SEGESTRIIDAE

8. *Ariadna lateralis* (Karsch) ミヤグモ 〔A(+4)〕

PHOLCIDAE

9. *Pholcus crypticolens* Bös. et Str. ユウレイグモ 〔A,C,D(♀〜+3)〕
10. *P. phalangioides* (Fuesslin) イエユウレイグモ 〔A(♀.−1)〕

MIMETIDAE

11. *Ero japonica* Bös. et Str. センショウグモ 〔A,C(♀)〕

THERIDIIDAE

12. *Anelosimus crassipes* (Bös. et Str.) アシブトヒメグモ 〔A(♀♂)〕
13. *Ariamnes cylindrogaster* Simon オナガグモ 〔(♀♂.+2〜3)〕
14. *Argyrodes bonadea* (Karsch) シロカネイソウロウグモ 〔A,C(♀♂)〕
15. *A. cylindratus* Thorell トビジロイソウロウグモ 〔B,D(♀♂)〕
16. *A. fissifrons* O. P. Cambridge チリイソウロウグモ 〔A(♀♂)〕
17. *A. fur* Bös. et Str. フタオイソウロウグモ 〔C(♀.卵)〕
18. *A. miniaceus* (Doleschall) アカイソウロウグモ 〔A,C,D(♀♂)〕
19. *A. saganus* (Dön. et Str.) ヤリグモ 〔A,D(♀♂),C(+3)〕
20. *Chrysso argyrodiformis* Yaginuma オダカグモ 〔D(♀)〕
21. *C. venusta* (Yaginuma) コガネヒメグモ 〔B(♀.卵)〕
22. *Dipoena castrata* Bös. et Str. ボカシミジングモ 〔A,D(+3〜4)〕
23. *D. flavomarginata* Bös. et Str. キベリミジングモ 〔A,C(−1〜2)〕
24. *D. mustelina* (Simon) カニミジングモ A,C(♀♂.−1)〕
25. *D. punctisparsa* Yaginuma シモフリミジングモ 〔A(♀♂)〕
26. *Enoplognatha transversifoveata* (Bös. et Str.) カレハヒメグモ 〔C,D(+3〜4)〕
27. *Phoroncidia pilula* (Karsch) ツクネグモ 〔D(♀)〕
28. *Steatoda cavernicola* (Bös. et Str.) ハンゲツオスナキグモ〔A(−3)〕
29. *Achaearanea lunata* (Clerck) カグヤヒメグモ 〔A.C(♀.卵)〕
30. *A. tepidariorum* (C. Koch) オオヒメグモ 〔A,C,D〕
31. *Theridion angulithorax* Bös. et Str. ツリガネヒメグモ〔B,D(♀)〕
32. *T. chikunii* Yaginuma バラギヒメグモ 〔B(♀)〕
33. *T. japonicum* Bös. et Str. ヒメグモ 〔A,C,D(−2〜3)〕

34. *T. kompirense* Bös. et Str.　コンピラヒメグモ〔A(♀)〕
35. *T. rapuluw* Yaginuma　ギボシヒメグモ〔B,D(−1〜2)〕
36. *T. sterninotatum* Bös. et Str.　ムナボシヒメグモ〔C(♀)〕

LINYPHIIDAE

37. *Labulla contortipes* (Karsch)　アシヨレグモ〔B(♀−1)〕
38. *Linyphia oidedicata* (Helsdingen)　ヘリジロサラグモ〔A(♀)〕
39. *Neolinyphia fusca* Oi　クスミサラグモ〔B,D(+2〜3)〕
40. *N. japonica* Oi　ツリサラグモ〔B(♀)〕
41. *N. nigripectoris* Oi　ムネグロサラグモ〔B,D(−2〜3)〕
42. *N. angulifera* (Schenkel)　ハンモックサラグモ〔B(♀−1)〕
43. *Prolinyphia longipedella* (Bös. et Str.) アシナガサラグモ〔C(♀)〕
44. *Strandella quadrimaculata* (Uyemura)　ヨツボシサラグモ〔B(♀♂)〕

SYMPHYTOGNATHIDAE

45. *Conoculus lyugadinus* Komatsu　ヨリメグモ〔B(♀)〕
46. *Mysmena jobi* Kraus　ナンブコツブグモ〔C,D(♀.−1〜2)〕

THERIDIOSOMATIDAE

47. *Theridiosoma epeiroides* Bös. et Str.　カラカラグモ〔A,B,D(−2〜3)〕
48. *Ogulnius pullus* Bös. et Str.　ヤマジグモ〔B(♀)〕

ARANEIDAE

49. *Araneus fuscocoloratus* Bös. et Str.　ヤミイロオニグモ〔A(♀−1)〕
50. *A. ishisawai* Kishida　イシサワオニグモ〔B(+2〜3)〕
51. *A. lugubris* (Walckenaer)　コゲチャオニグモ〔A(♀−1)〕
52. *A. subpullatus* Bös. et Str.　ヘリジロオニグモ〔A(−2〜3)〕
53. *A. ventricosus* (L. Koch)　オニグモ〔A,C(♀.−1〜2)〕
54. *A. pentagrammicus* (Karsch)　アオオニグモ〔A,C(♀,+2〜3)〕
55. *A. pseudocentrodes* Bös.et Str.　トガリオニグモ〔D(♀)〕
56. *A. ejusmodi* Bös. et Str.　ヌサオニグモ〔A(♀)〕
57. *A. viridiventris* Yaginuma　ハラビロミドリオニグモ〔D(♀♂)〕
58. *Neoscona mellotteei* (Simon)　ワキグロサツマノミダマシ〔A,B,D(−1〜2)〕
59. *N. scylloides* (Bös. et Str.) サツマノミダマシ〔A,D(♀♂)〕
60. *N. nautica* (L. Koch)　イエオニグモ〔A(♀)〕
61. *N. scylla* (Karsch)　ヤマシロオニグモ〔(♀♂)〕
62. *Argiope aetherea* (Walckenaer)? チュウガタコガネグモ〔C(♀.卵)〕
63. *A. amoena* L. Koch　コガネグモ〔A(♀)〕
64. *A. minuta* Karsch　コガタコガネグモ〔A(−2)〕

65. *Chorizopes nipponicus* Yaginuma　ヤマトカナエグモ〔A(+3)〕
66. *Cyclosa argenteoalba* Bös. et Str.　ギンメッキゴミグモ〔〔B(+3)〕
67. *C. octotuberculata* Karsch　ゴミグモ〔A(+2〜3)〕
68. *C. sedeculata* Karsch　ヨツデゴミグモ〔(♀♂〜+3)〕
69. *Cyrtarachne bufo* (Bös.et Str.)　トリノフンダマシ〔D(♀)〕
70. *C. inaequalis* Thorell　オオトリノフンダマシ〔A,D(♀♂)〕
71. *C. nagasakiensis* Strand　シロオビトリノフンダマシ〔A,D(♀.−1)〕
72. *C. yunoharuensis* Strand　アカイロトリノフンダマシ〔D(♀)〕
73. *Larinia argiopiformis* Bös. et Str.　コガネグモダマシ〔A(−2〜3)〕
74. *Meta kompirensis* Bös. et Str.　タニマノドヨウグモ〔D(♀)〕
75. *M. reticuloides* Yaginuma　ヤマジドヨウグモ〔A,B(♀♂.−1〜2)〕
76. *Nephila clavata* L. Koch　ジョロウグモ〔(−2〜4)〕

TETRAGNATHIDAE

77. *Leucauge magnifica* Yaginuma　オオシロカネグモ〔A,D(♀♂)〕
78. *L. subblanda* Bös. et Str.　コシロカネグモ〔C(♀)〕
79. *L. subgemmea* Bös. et Str.　キララシロカネグモ〔D(♀)〕
80. *Tetragnatha japonica* Bös. et Str. ヤサガタアシナガグモ〔D(♀)〕
81. *T. praedonia* L. Koch　アシナガグモ〔A(♀)〕
82. *T. squamata* Karsch　ウロコアシナガグモ〔C(♀♂.+3)〕

UROCTEIDAE

83. *Uroctea compactilis* L. Koch　ヒラタグモ〔A,C,D(♀.−1〜3)〕

AGELENIDAE

84. *Agelena limbata* Thorell　クサグモ〔(♀♂)〕
85. *A. opulenta* L. Koch　コクサグモ〔(♀♂−1)〕
86. *Coelotes exitialis* L. Koch　ヤチグモ〔D(♀)〕
87. *C. modestus* Simon　ヤマヤチグモ〔B,C(−2〜+3)〕

PISAURIDAE

88. *Dolomedes hercules* Bös. et Str.　スジボケハシリグモ〔A(−3〜4)〕
89. *D. sulfureus* L. Koch　イオウイロハシリグモ〔A(♀),C.D(−3)〕

LYCOSIDAE

90. *Lycosa coelestis* L. Koch　ハラクロコモリグモ〔A(♀)〕
91. *Pardosa astrigera* L. Koch　ウヅキコモリグモ〔A,C(♀.−1)〕
(?=*Pardosa* T-*insignita*: Kishida, *et al.*, nec Bös. et Str.)
(?=*Pardosa T-insignita* Bös. et Str.)
92. *P. laura* Karsch　ハリゲコモリグモ〔C,D(♀♂)〕

93. *Pirata japonicus* Tanaka　ヤマトコモリグモ〔B(♀)〕

OXYOPIDAE

94. *Oxyopes sertatus* L. Koch　ササグモ〔A(♀.卵.+2)〕

THOMISIDAE

95. *Misumenops japonicus* (Bös. et Str.)　コハナグモ〔A(♀♂)〕

96. *M. tricuspidatus* (Fabricius)　ハナグモ〔A,B,D(+3～4)〕

97. *Oxytate striatipes* L. Koch　ワカバグモ〔(−3～+3)〕

98. *Philodromus spinitarsis* Simon　キハダエビグモ〔A(−2)〕

99. *Pistius truncatus* (Pallas)　ガザミグモ〔A,C(+3～4)〕

100. *Thomisus labefactus* Karsch　アズチグモ〔D(♀)〕

101. *Tibellus tenellus* (L. Koch)　シャコグモ〔C(−2～3)〕

102. *Tmarus piger* (Walckenaer)　トラフカニグモ〔(+2～3)〕

103. *Xysticus croceus* Fox　ヤミイロカニグモ〔D(♀.−1～2)〕

104. Thomisidae Gen. et sp. (Ibokanigumo)　〔A(+3),C(♂)〕

SALTICIDAE

105. *Aelurillus festivus* L. Koch　ヤマジハエトリ〔D(♀)〕

106. *Bianor pullus* Bös. et Str.　キレワハエトリ〔B(♂)〕

107. *Boethus sexdentatus* Yaginuma　ムツバハエトリ〔A,C(♀♂)〕

108. *Carrhotus xanthogramma* (Latreille)　ネコハエトリ〔A,C,D(♀♂)〕

109. *Dendryphantes atratus* (Karsch)　カラスハエトリ〔A,C,D(♀)〕

110. *Evarcha albaria* (L. Koch)　マミジロハエトリ〔A,C,D(♀)〕

111. *Euophrys undulatovittata* Bös. et Str.　イナヅマハエトリ〔C(♀−1)〕

112. *Hasarius doenitzi* Karsch　デーニッツハエトリ〔A,C(−2～+4)〕

113. *Icius linea* (Karsch)　メガネアサヒハエトリ〔A,D(♀)〕

114. *Laufeia aenea* Simon　エキスハエトリ〔A(♀.+2～3),C(♀)〕

115. *Marpissa elongata* (Karsch)　ヤハズハエトリ〔B(♂)〕

116. *M. magister* (Karsch)　オスクロハエトリ〔D(♀)〕

117. *Menemerus confusus* Böe. et Str.　シラヒゲハエトリ〔A,C(♀♂)〕

118. *Myrmarachne japonica* (Karsch)　アリグモ〔A,D(♀)〕

119. *Plexippus crassipes* Karsch　アシブトハエトリ〔A(♀)〕

120. *P. paykulli* (Audouin)　チャスジハエトリ〔A,D(♀),C(♀−1)〕

121. *Pellenes ususudi* Yaginuma　ウススジハエトリ〔B(♀−1)〕

122. *Silerella vittata* (Karsch)　アオオビハエトリ〔A(♀.+3)〕

123. *Telamonia bifurcilinea* Bös. et Str.　キアシハエトリ〔A(♀)〕

CLUBIONIDAE

124. *Chiracanthium japonicum* Bös. et Str. カバキコマチグモ 〔A(♀)〕
125. *C. lascivum* Karsch ヤマトコマチグモ 〔A(♀♂)〕
126. *Clubiona japonica* L. Koch ヤマトフクログモ〔A(♀)〕
127. *Phrurolithus pennatus* Yaginuma ヤバネウラシマグモ 〔A, C(♀.−1)〕
128. *Trachelas japonicus* Bös. et Str. ネコグモ 〔C(−2〜3)〕

HETEROPODIDAE

129. *Heteropoda forcipata* (Karsch) コアシダカグモ 〔A(♀.−1), C(+3)〕
130. *H. venatoria* (Linné) アシダカグモ 〔A(♀.+3〜4)〕

CTENIDAE

131. *Anahita fauna* Karsch シボグモ 〔C(♀)〕

GNAPHOSIDAE

132. *Zelotes pallidipatellis* (Bös. et Str.) マエトビケムリグモ〔C(♀)〕

まとめ

伊豆半島における談話会合宿の成果は以上の132種であった。3日間の採集記録としては最も標準的な数字と考えている。本州南岸線よりかなり南の地域であるために、当然南方系種が多く、オダカグモ、イソウロウグモ類(日本に分布する全種)、トリノフンダマシ、オオトリノフンダマシ、シロオビトリノフンダマシ、アカイロトリノフンダマシ、イボカニグモ等が多数採集された。

132種の中で戦前の高島氏他の記録になかったクモは62種あり、この中には1950年以降に新種記載または日本新記録となったセスジガケジグモ、オダカグモ、コガネヒメグモ、シモフリミジングモ、バラギヒメグモ、*Neolinyphia* spp.、ナンブコツブグモ、ハラビロミドリオニグモ、ヤマトカナエグモ、ヤマジドヨウグモ、ヤマジハエトリ、ムツバハエトリ、ヤバネウラシマグモ等が含まれている。また逆に戦前の記録にありながら採集できなかったクモも53種あった。

伊豆半島のクモに関する文献

植村利夫・高島春雄、(1936) 夏の蜘蛛 下田と天城. *Acta arachnol.*, 1(4): 128−134

植村利夫、(1937) 伊豆天城山産2新蜘蛛の記載. 同上, 2(4): 150−156.

加藤正世・高島春雄、(1939) 伊豆下田採集行. 昆虫界, 7(69): 700−704.

高島春雄、(1940a) くもを掴む(Ⅲ), 昭和14年7月伊豆下田の蜘蛛. *Acta arachnol.*, 5(1): 33

関口晃一、(1940) 同上, 昭和14年9月伊豆下田の蜘蛛. 同上, 5(1): 34.

辻忠二郎、(1940) 同上, 昭和14年夏の伊豆下田の蜘蛛. 同上, 5(1): 34−35.

高島春雄、(1940b) 天城の動物雑感(Ⅱ). 同上, 5(2): 132−138.

———、(1940c) 伊豆下田の蜘蛛一覧. 博物学雑感, 38(69): 14−18.

———、(1941) 伊豆下田の蜘蛛追加. *Acta arachnol.*, 6(1): 17−18.

編　集　後　記

地球の裏側、西ドイツから日本のクモの便り。ちょっとおかしな気もしますが、日本にまだクモをする人のなかった頃の、私達にとっては昔昔が顔をのぞかせてくれました。それと同時にラベルの大切さを感じさせる貴重なものでもありました。今はもう多くの朋輩がいて、このような楽しい会を作っていることなど、当時の人は想像もしなかったことでしょう。　１人１人の観察や記録がよりクモに親しみを感じさせてくれます。今回はＣＭがきいたのか、予定の倍にも及ぶ原稿が集まった事も、いかに楽しくクモに接しているかの表われだと思っています。

ちょっと発行が遅れてしまいましたが、内容に免じてお許し下さい。今回は編集局のほか、実行委員として協力して下さった田中理恵・嶋田順一両氏、諸事御助言下さった竜虎両雄にお礼申し上げます。

５３・５４年度運営委員

萱嶋　泉・熊田憲一・栗原輝代子・榧田重雄・嶋田順一・新海栄一・高橋　登・田中理恵・蓮沼克己・松浦祐司

本会代表：萱嶋　泉　　会計・総務：新海栄一　　会誌編集：熊田憲一

会計監査：大熊千代子・国見裕久

本部	〒191	東京都日野市豊田１８９６	萱嶋　泉
会計受付（事務局）	〒185	東京都国分寺市本多１－６－６	新海栄一
原稿受付（編集局）	〒221	横浜市神奈川区片倉町１９９	熊田憲一
通信用原稿受付	〒190－12	東京都西多摩郡瑞穂町武蔵４１	田中理恵

ＫＩＳＨＩＤＡＩＡ　No.　４２　　１９７７年１２月３０日印刷　編集者　熊田憲一

１９７７年１２月３１日発行　発行者　萱嶋　泉

発行所　東京蜘蛛談話会

〒191　東京都日野市豊田１８９６　萱嶋泉方

印刷所　東京都町田市原町田４－９－７　富士工房